
three 龍の血を持つ娘

Knight bug

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

three 龍の血を持つ娘

【Zコード】

N7245U

【作者名】

Knight bug

【あらすじ】

あの時あの場所で、私達が出会わなかつたら、こんな事にはならなかつたのかも知れない。

五才だつた優太と百合香が攫われた。

そんな矢先、幼い2人を拐つた赤い双眸の男。男は、優太の銀髪と灰色の瞳を見て「竜の血を持つ娘だ」そう言って優太の血を蒼い小瓶に入れた。

あの言葉の意味を考えながら2人は、それぞれ別の事を胸に秘めて

生きて来た。

もし自分が百合香だつたらどんなに良かつたんだろうか
ただ守られる存在なら、女の方がまだマシだ。
もし、私が優太だつたら、どんなに良かつたんだろうか
好きなあの人と肩を並べて笑えるのに . . 。
その思いがもし、叶つてしまつたら 。

プロローグ

百合香

男嫌いな性格が災いしてか、某有名私立女子校に初等科の二学年時に編入学。

性格は、大人しいと周りの友人達は、声を揃えて言うが・・・。巨大な猫を頭の上に飼っていた。

趣味は、お茶に日本舞踊と言っているが・・・。弟の優太の話に寄れば、今はもつぱら空手と合気道だと言っている。

百合香の男嫌いの原因は、優太と一緒に誘拐された時に起こったある出来事からだつた。

優太

双児の弟で、自分では世界一不幸な男だと言つてはいる。

性格は、温厚過ぎて、よく百合香からダメ優太といつもなじられている。嫌とは言えない腰が低い男である。相手の事を自分の事のように考え行動する、お人好しタイプ。潔癖性。

趣味？ 姉のお陰で趣味を作る暇が無くなつた。姉の時間が俺の趣味なのか・・・。今の所は百合香の影武者と言つたが、女装だな。

神谷 トオル

優太の悪友であり、幼馴染み。

雲のようにフワフワとしていてつかみ所のない男。

百合香だけを幼少の頃から、百合香だけを見つめて来た。いつか、百合香に告白する事を夢見ている。

来年は、百合香と同じ高校に進学する事にした。
趣味は、ピアノ。

持田 綱吉

優太と百合香の叔父。性格は、良い性格だと本人は言っている。温厚派。

特技、優太を懲らしめる事。結構サドである。
ガーディアンとして優太を守る為に、百合香の補助役を勝手でいる。

小田マリア

百合香の親友であり、優太の事を恋いこがれている女の子。ようやく自分の思いに気がついてくれた（？）優太から、卒業式に学ランをプレゼントしてもらった。

性格 とても大人しい。百合香曰く、マリアは優太を女にした感じと言う事だ。

ジェイ

ボックスに入っていた竜。

無事、優太に名前を付けてもらい召還成功！

流れるような銀髪に銀色の瞳を持つ少年に姿を変えた。

レオン

百合香が持っていたボックスに入っていたもの。

高飛車な言い方をして来る

プロローグ（後書き）

初めて異世界物を書き始めました。
誤字脱字の箇所がありましたら、教えて下さい。

今でも思い返せば、あの時あの場所を通らなかつたら、こんな事に巻き込まれる事は無かつたのかも知れない。

あの日、家を出るのに後5分早かつたら、いつものバスに乗つてピアノ教室に行つていたのに . . .

そうしていれば、あのボックスを拾う事も無かつたのに。

悔やんでも悔やみきれない自分の運命。

神様 . . . やっぱり私つて不幸だわ。

半年くらい前のことだった。

溜息をつく百合香に、弟の優太が暢氣そつに歯を磨いている。

「姉ちゃんつてば、何 乙女じゅじゅてんだよ~。学校に遅刻するよー早くー！」

慌てて、セーラー服のスカーフを結ぶと2人は急いで家を出た。百合香が溜息をつくのは、決まって女子校行きのバス停に百合香曰当ての近所の男子校や中学の男子生徒達が群がつて居るからだ。タダでさえ、男嫌いの百合香は優太や親しい幼馴染みのトオル以外の男に近寄られるのが耐えられないのだ。

二丁目の角を右に曲がった百合香は優太に「今日は、優太あんたが夕飯の当番なんだからね！忘れないでよー！」 そう言つと走つて親友の小田マリアに駆け寄つて行つた。

「御機嫌よつ。マリア」

「御機嫌よつ。百合香ー」

百合香は、マリアと一緒にバス停に向つてゆっくりと歩いて行った。

優太は、姉百合香の言葉に「げ！覚えてやがったのか・・・。つたく、色氣も無いくせに、食意地だけは張つてゐるんだよなー。あんないで恋人とか出来るのかあ？」ブツブツ言つてゐる優太は、幼馴染みの神谷トオルに学生鞄でボコッと朝の手荒い挨拶を受けた。

『ツ！痛！んだよ！トオル テメエ！毎朝、鞄で人の頭叩くことねえだろ！』

フフンと鼻であざ笑うかのようにトオルは、流し目で角を曲がつて行つた優太の姉百合香を見ていた。

ぽおつと赤くなる頬。そんなトオルを見て優太は「こんなことしてんのが、百合香にバレたら、それこそトオルは百合香に嫌われるかもな。イシッシッシ。」ニヤリと笑う優太に、すぐさま抱きつくとトオルは、優太の陶磁器のように白い頬に自分の頬を擦り寄せた。ぞわ～つとする感触。優太は、鳥肌が立つて來た。潔癖性の優太はとにかく人に無断で触られるのが一番嫌いなのだ。百合香は別なのだが、それはもちろん姉だし、年がら年中 一緒に一つ屋根の下で暮らしていれば、そんなどは関係ないのだろう。だが、例え友達でも肌に直接触られるのだけはゴメンだ！！

「どわあ～！！ 觸んな！俺がそういう趣味じゃないのはお前がよく知つてんだろ！トオル！」

トオルは、ニカツと笑うと鞄を後ろ手に持つて、空を見上げながら一緒に歩いてゐる。

「ワリーワリー。でもさ～何で百合香ちゃんは、こっちの中学に通わないんだ？俺、絶対に彼女の事を守つてやるのにさ～」

トオルは、俺の近所に住んでいる。腐れ縁も腐れ縁。トオルのお袋さんと俺の母さんは、百合香と同じエスカレーター式の学校で、幼稚舎から大学まで一緒に、しかも親友だった。そのトオルは、俺の隣に住んでいる。見た目スポーツ馬鹿だが、勉強はそれとなしに出来るようだ。学年で20位に入つていれば、何処の高校も大丈夫だろうと担任に言われたからさーと言つていたしな。

問題は、この担任・・・。あいつの事を考へるとまた頭が痛くなつて来たぜ。

「百合香？共学に興味が無いのは、お前だつて知つてんだろう？アイツは、根っからの男嫌いだ。俺達が双児で、しかもそつくりつて言うのだつて、嫌なのにさ。何でまた百合香と一緒に暮らさなきやなんねーのか・・・。」

「え！？お前、百合香ちゃんと2人つきりで同棲してんのか？」

トオルの勘違いにも甚だしい言い方に、俺は白い目でトオルを見る。両肩を落とした俺は、言つてしまつた事に後悔したが、トオルに俺達姉弟がどうして一緒に住む事になつたのかを話始めた。

俺が言つのもなんだが、俺の顔は、双児の姉百合香にソックリだ。そのまま百合香の学校の制服を着れば、百合香に間違えられる確率150%だが、百合香は俺と一緒に共学の中学ではなく女子校に入った。しかも、初等部からだ。詳しく言えば、初等部に編入したつて言つた方が良いな。

成績優秀の俺と比べられるのが嫌だと言うのと、女子校の方がのんびりして気兼ねなく出来るからつて本人は言つていたが。

しかし、その百合香が通つ女子高だつて、ここ地域ではかなり難易度の高いお嬢様学校だ。そんな所にすんなり入れるのか？ な

「優太！一生のお願い！私の代わりに試験を受けて来て！ さもなんて思つたら、百合香の編入試験日の前日に、百合香が俺の部屋にいきなり入つて来た。

「優太！一生のお願い！私の代わりに試験を受けて来て！ さもないと……」
「ぐええ～！～！」

もちろん、俺は断つたさ。だが、秒殺で百合香に羽交い締めにされ、言う事を聞くはめになつた。

結果は、もちろん合格。しかも、成績優秀な俺様だったから、百合香は中等部の新入学生の挨拶を任される事になつた。だけど、このお嬢様学校の編入試験つて、面倒臭いんだよな。筆記は勿論だが、同じ編入試験を受ける人達と混じつて昼飯を食べるのだが、其処でも試験官の目が厳しい。どんな動作も逐一調べられているつて感じで、俺はその時モルモットになつてしまつた気がした位だ。

運動能力テストもあって、一日かけての編入試験が終わつた時には、どつと疲れが出た。この学校の編入試験は、学校を出たら終わりではなく、家に蛙まで続くのだ。今回の編入試験を受けた人数は全部で10人。

合格したから良かつたものの、これで落ちていたら、俺百合香に殺されるつてマジに思つた位だ。

ホツとしたのもつかの間、俺の不幸は、ここで終わつていた訳ではない。

試験の度に借りられる訳にはいかないから、百合香の勉強を俺が見る事になつた。百合香も成績をキープしておかないといけないと言う事で、必死になつて勉強していたな。そうしないと、変わり身がバレてしまうからな。お陰で中等部も今の所、学年トップだと言つている。

それは、俺の唯一の趣味である魔術書の本を解読する事が出来なくなると言つ事だつた。

両親達は、百合香よりも俺が居るからと言つ事で、今年から海外に仕事で行く事になった。

そつ言つ訳で、俺達 姉弟が一つ屋根の下で一緒に過ごししている訳だ。

始業のベルが鳴る前に、急いで教室に入ると、百合香田当ての野郎達が俺の所にやつて来て、「百合香ちゃんに、こ、これ渡してくれよ。」そつ言つて、俺にラブレターを渡して来た。そんなのが毎日だ。嫌になつて来るぜ！

HRも終わり、俺は大きく伸びをしながら、今日の夕飯の事を考えていた。手を抜いたら、ソレこそ百合香にコブラツイストで締め上げられるかも知れないと考えると眉間に皺を寄せて、溜息をついていた俺。

いつの間にか授業が始まつていたらしく、モツチーが教壇に立つていた。教科書を見るでもなく、ただ外の雲をぼくと見ていた俺は、カリカリと隣の席から珍しく聞こえて来る音に、気付いた。（もうすぐ試験だからって、何やつてんだか。）

溜息をつきながらも俺の隣の席にいる、間抜け面のトオルを見ていた。

トオルは、何やら机の上の紙に、高校の名前を書いていた。ん？その高校つて聞いた事があるけど、何処だつけ？

そう考えてじつと、トオルを見ていたら、アイツ いきなりニカッと笑いやがつて……。

「イヤーン！ 優太 見るなよ。エッチ

目が点になつた俺は、真つ赤になつた顔でガタンと大きな音を言

わせて立ち上がると、いきなり数学の先生から笑顔で言われた。

「おー、レオンが解いてくれるのか。じゃ、前に出て来て解いてくれ」

レオン。 そう俺が一番嫌がる名前。

優太と百合香の祖父はイギリス人で名前がレオンハルト＝ホワイトウイングナーと言う人だ。代々、ホワイトウイングナーの一族は祖父と同じ名前を男にして、女は祖母と同じ名前を付けるのが習わしとなつていて。優太も百合香も、日本生まれだが、毎年夏はホワイトウイングナー家があるイギリスへ行く事になつていて。ま、それはさておき、名前だがレオンハルトは俺のミドルネームだ。百合香はペトロと言われているが、祖母はロシア人だつた。ちなみに祖母の名前はナターリア＝ペトルーシュカ＝ウォルグスキー（旧姓）。

俺達の髪は黒髪だが、実は染めている。染めていないと曰立つし優太も百合香もこれ以上、人前で目立ちたく無いからだ。

本当の地毛は、銀髪だ。多分 隔世遺伝なんだろうな。瞳は、大きな灰色の瞳。これは何にも小細工もしない事にした。

仕方なさそうに立ち上がると優太は、自分の席から黒板まで歩いて行つていた。優太の頭の中では、この15年間の思い出が走馬灯のようになつて来る。

無表情で淡々と数式を黒板に書いて、すぐに問題を解いた優太をレオンと呼んだ この数学教師持田綱吉は、パンパンと手を叩いて拍手して来た。

「さつすが、レオンだね～。正解！」

俺は、自分の席に戻るついでにボソッとモッチーに言った。

「モッチー。レオンって呼ぶのだけは、ヤメ口つて言つただろ」

キラリと光る銀縁のメガネをゆっくり上げながら、モツチーは「お互い様だろ？レオン。」そう言つて来た。

「アイツ、絶対俺にケンカ売つてんだよ。つたく！」

優太は、チャイムが鳴つたと同時に大きく伸びをして、自分の席に座つた。そんな俺の頭を軽く出席簿で叩いて来たモツチーは、笑顔で優太に「顔を貸せ」そう言つて来た。

職員室に行くんだろうと思つていた優太は、モツチーの後を着いて行つた。だが、優太の予想は外れてモツチーは、職員室を素通りして、小会議室へ連れて行つた。

そこに座れと言わんばかりに顎で示すモツチー。

優太は、椅子にドカツと腰を下ろすと、モツチーが目の前に座るのを待つた。

しんと静まる小会議室の中では、静寂と言う時間が過ぎて行く。ただ、時計の秒針を刻む音が、静かにそして規則正しく聞こえて来る。

「で？何が言いたい訳？また、百合香の事とかじゃねーだろつな」

痺れを切らした優太が、モツチーに問いかけると、モツチーはニヤリと笑つていた。

一枚の紙を俺の前に、スッと置いたモツチー。その紙は、進路予定表だ。俺達中三になると進路を決めて、それに向つて別々の高校へと向つて行かなければならない。だが、俺の予定表は、真っ白だ。

「どうして、書かないんだ？レオン？お前だつたら、何処でも軽く入れるだろ？何て言つたつて、こないだの模試は、全国2位だつたんだからな」

優太は、目眩を起こしそうなくらいに溜息をついた。進路進路進路つて、今更進路を決めてどうするんだよ。優太自身、気付いてい

なかつたが、思わず心の声を独り言で呟いてしまつた。

「高校とか、別に考えていない。俺は、百合香の影武者だしなー」

「百合香ーあー懐かしいなー。そういうや、トオルは百合香と同じ学校にすると言つていたぞ。じゃあ、お前もそこにしといてやる」

いきなり決まつた俺の進路。でも・・・百合香の学校つて女子校じゃなかつたつけ？俺にまた女装しようとでも言つのか？ジト目でモツチーの日に焼けた顔を見つめると、モツチーは優太の頭を大きな手で撫でると髪の毛をくしゃくしゃにした。

「大丈夫だ。可愛い、甥っ子を女装させたりなんかしねーよ。なんことよりも、レオン、お前本当に知らないのか？」

そう、この持田綱吉は、俺の母さんの弟なのだ。俺の担任は中三まで全然変わらなかつたのは、俺がモツチーの甥だと言つ事なんだそうだ。良いのか？校長！

しかし、その女装を俺に無理矢理させたのは、モツチーあんただろ！ そう、あれば、百合香が3年の時だつた。俺のお守りをするのはもう嫌だと両親に泣きついた百合香に、母さんは自分の出身校である某お嬢様学校 聖ミシユカ女学院に入れる事にしたのだが・・・

百合香の今の成績じゃ難しいと判断したんだよな。それで、叔父でその時大学出たてのペーぺーだつたモツチーに、その学校の編入試験の事を聞いて来た。その時モツチーが出した結論は、俺に女装させて聖ミシユカ女学院の編入試験を受けさせる事だつた。それまで長い銀髪に灰色の目をしていた俺は、確かにちょっと見ただけで女に間違われた事など、あるわけ・・・ある。

俺は、モツチーに半ば強制的に女装させられ、聖ミシユカ女学院の初等科に連れられて行つた。筆記、運動、行動テスト共に満点を獲

得した俺は、文字通り優秀な成績で編入試験に合格する事が出来た。あの時に下着まで女物を履かされた恨みは忘れないぞ！しかも、女装姿まで写真に撮りやがって！思い出しただけでも、拳に力が入つて来た。

「何を？」

優太は、クシャクシャにされた髪の毛を手櫛で整えると、詰め入りの胸ポケットに入れて置いた鏡で自分の髪をチェックしていた。黒髪の根元から、銀色が少しであるが見えて来ている。

優太は、角度を変えて髪をチェックしていた。

（はー。また染めなきゃいけねーな。気分は、白髪染めだぜ）

「百合香の学校さー。来年度から、共学になるんだぜ。そうなるとアイツの事だ。学校に行かないとか言い出すんじゃネーのか？」

優太は、持っていた鏡を机の上にポロッと落としてしまった。鏡は割れはしなかつたが、コトンと軽い金属音が小会議室内に響いた。左手で前髪を搔き揚げると、頬杖をついた優太は大きく溜息をついた。

あり得る・・・男嫌いの百合香なら、そう言つ事を言つ可能性は、大ありだし、それに何も百合香の事を知らずに近づいて来る男達が危ない。百合香の得意技の足蹴りで顎の骨でも折られかねない。そんな物騒な想像をしていた優太の顔は青ざめていた。

しかし、ふと冷静に物事を考えれば、他の選択も出来る事に気がついた優太は、モツチーを見てニンマリと笑つた。

「モツチー。そんなに百合香の事が心配なら、モツチーが百合香の学校に移れば良いんじゃねー？ だってさー、モツチー高校の数学教師の免許持つていいんじやねー？ そうすりやー、俺が行かなくても良

いんだけどなー」

そんな俺の考えなんかお見通しだったのか、モツチーは、黒い瞳を輝かせて俺の尖った顎を人差し指と親指で掴むと迫つて来た。優太は、まるで蛇に睨まれた力エルの状態となり、顔面蒼白になつた。優太の目の前の数学教師、持田綱吉は、中学と言うか地元でも結構人気の教師で生徒達からのファンレター、そして父兄からの信頼と言つ名のファンレターが殺到するくらいだ。

軽くウエーブがかかった黒髪、少し日焼けした肌に切れ長で黒い瞳。モツチーの意志を尊重するような形の良いキリリとした眉。笑顔が絶えないのは、本人もチャームポイントにしている白い歯だ。これで、落ちない女は居ないだろう。しかし本人は、ガーディアンとしてここに居る為に独身を貫いていると言つても、今年26才だ。

「優太。お前、俺がそう言つ事を決めたら、こここの学校の生徒達から、狙われるのはお前だぞ」

一気に青ざめた俺は、ハツした。た、確かにそうだ。モツチーがバレンタインにチョコを貰うわけには行かないと女生徒達に言つたら、俺は彼女達に呼び出されて質問攻めにされ、挙げ句の果てに「モツチーにチョコを渡したいんだから、あんたが責任持つて渡しなさいよ！」とそこまで言われたのだ。

あの地獄の思い出が蘇つて来る・・・。優太は、がっくりと肩を落とすと力なく頷いた。

「分かった。行くよ。百合香と同じ所」

平和主義者の優太には、この悪魔の様な慧眼な叔父モツチーには、昔から頭が上がらないのだ。モツチーに呼び出されないように、何とかして勉強もスポーツもそれなりに努力して来た優太。その努力が、

要らぬ方へ向いて来ているのだった。

優太に何とか、百合香と同じ系列の学校へ行かせる決意をさせたモツチーは、終始和やかな笑みを口元に讃えていた。

モツチーが、俺とトオルを推薦枠に入ってくれて、俺達は晴れて百合香と同じ高校へと行ける事になった。

中学の卒業式の日、優太は他の女子生徒達から呼び出され、ボタンと言うボタンを全て取られて行つた。まるで盜賊にでもあつたかの様に、ボロボロの制服姿となつた優太は、自分の目の前に百合香の親友マリアが居た事に気がついた。

優太は、平然とそんなことをしていたが、本当はどうして皆が自分の学ランの金ボタンを筆り取つて行くのかと言う事は、自ずと理解出来ていた。皆が心に思つてるのは、俺ではなく百合香と言う彼女達の女神を慕つて、少しでも百合香に近づきたい思いで俺のボタンを筆り取つて行つただけのこと。マリアもその一人なんだろう。マリアからも、ボタンを下さいと言われていたのだが、ボタンは全てない。そこで、優太は苦笑いしながらも、マリアに自分の学ランを渡すとニッコリ微笑んだ。

「男臭いかもしねないが、これやるよ。」

マリアは、真つ赤な顔をしながらも、渡された優太の学ランをギュッと握つていた。

「たまに、百合香もそれ着てたんだ。」

俺の言葉に、驚いたような顔をしていたマリアを見て、俺はただ何処までも青い空を見上げていた。

その日は、俺の右には百合香そして左にはマリアがいた。他の人から見ると両手に花なんだろうが、俺に取つては暑苦しくてどうせな

ら、女2人で仲良く歩いて行つて欲しいと思っていた。其処へ、叔父のモッチーもやって来て、この日は、マリアと別れた後でモッチーの家に行つて宴会と言ひの打ち上げがあった。

龍の娘の血

怒濤の卒業式も終わった次の日から、春休みとなる。

俺と百合香は、ピアノ教室へ行くバスに乗る為に走つて家を出た。その時、トオルもたまたま通りかかって、着いて来る事になった。何処をどう調べたのか知らないが、百合香がどうやらこのバスに乗つて隣町のピアノ教室に行つていると言う事を突き止めた暇人がいたらしい。バス停には、男子学生の列。

それを見た百合香の足が竦んで、バスには遅れてしまった。不安そうな百合香の顔を見て、俺は携帯を取り出すとすぐにこれら行くピアノ教室に電話をかけていた。

「少し遅れそうなので、待つている人を先にお願いします。」

百合香曰く、「ピアノ講師もみんな優太の事を一番に可愛がつている」と言つていた。

果たして、そうだろうか。期待されているから頑張るだけで、それに答えれなかつたら、どうしようと俺はいつも悩んでいるんだが。そんな俺の気持ちなんて百合香には、分からんだろうな・・・。きつと。

百合香の男嫌いは、俺達がピアノ教室に通い始めた頃にまで遡る。あれは、5才の春。丁度 今日と同じようにバスに乗つてピアノ教室に通つていた、あの頃。俺達は母親とバス停ではぐれてしまつたのだ。当時の俺達双児の髪は銀髪。 特徴のある髪にも関わらず、俺達は行方不明となつた。

あの時、バス停で俺と百合香の手を引っ張り、連れ去つた男は、深紅の双眼をしていた。ニヤリと笑うと俺の長い髪を掴んだ。俺達は、その赤い双眸を持つた男と三日間過ごす事になつたのだが、俺達に

指を触れる事はなく、ただ俺の血を欲しがっていた。百合香は、自分の目の前で弟である俺の手首にナイフが充てられるのを見て、ガクガク震えていた。俺はただその男の赤い双眸をじっと睨んでいた。俺の手首の上を踊るようにナイフが走った。痺れるような痛みと赤い俺の血がゆっくり流れしていく。

苦痛に歪む俺の表情を見て、男は気味悪い薄ら笑いを浮かべていた。俺の血を不思議な蒼い小瓶に入れると満足げに笑っていた。

「龍の娘の血。しかと貰つたぞ。」

そう男は言つと、霞の「」とく消えて行った。俺達が駆けつけた警察官達に発見されたのは、俺達が攫われてから5日後のことだった。俺は、左手首に傷を負い、百合香は宙を見つめて震えていたと言つ。俺は覚えていないが、百合香は女性警官が来るまでの間、ずっとその場所から離れなかつたと言う事を後で俺は、知つた。この誘拐事件以来、百合香は男を極端に嫌うようになった。ただ違うのは、トルオルの事だけは昔から見知つてるので、アイツだけは百合香にとつても特別な存在のようだ。

俺達は、近道をする為に普段は滅多に通らない空き地を抜けて行つた。

春だと言つのに、この所の晴天のせいか、植物が枯れて来ていた。俺は帽子を取ると、すっかり銀髪に戻つた髪を風に靡かせた。百合香の腰まで届く長い黒髪は、この所 全く染めてないので、こちらも銀髪に戻つて来ている。枝に髪の毛が引っかかりそうだったから、優太が百合香の肩を掴むと髪を帽子の中に入れてやつた。

「ありがとう。優太。」

トルオルは、百合香に手を差し出すと百合香は少しハニカんだように

して、トオルの手を握り返そうとした時、自分達の足下に不思議なボックスが落ちているのを見つけた。

トオルの近くには青いボックスで金の模様が刻んであった。

優太の足下には、銀のボックスで朱と金の模様が刻んであった。

百合香の足下には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであった。

三人が、それぞれのボックスを手にした時に、空から声が振つて来た。

「ボックス・・反応アリ」

三人の足下が光ったかと思うと、いきなり俺達は時空の歪みに引きずり込まれて行つた。

一瞬、世界が真っ白の光の粒で覆われた様に見えた。

俺は起き上ると、自分の髪が長いことに気がついた。
平たい胸を探すために、ペタペタと両手で胸を触ると「ン」という
ような柔らかい感触。

そ、そう言えば、さつきから足元がスースーする様な気が . . .

お、俺が百合香になつていてる？

周りを見渡すと、百合香もトオルも居ない。
これはもつ、悪い冗談なんだろうと思つてると、田畠がして來た。

暗闇の中でざわざわとした声が聞こえて来る。

五月蠅いな . . . 人が眠つている時に、何をもめているのだろう . . .

目をゆっくりと覚ますと、ドアアップで男の顔が俺に近づいて來ていた。

「キヤーー誰なのー痴漢！」

俺は驚いて目の前の男の横つ面を平手で張り倒した。

パチンと言つ様な軽い音に、目の前の男は俺に叩かれた左頬を赤く
していた。

一瞬、その場の空気が止まつた。

「ふ、無礼者！ アレキサンドルフ様になんと言つ事を！！」

俺がとつさに取つた行動を見て、目の前の男は驚いた様な顔をし
ていたが、クスッと笑うと「気に入つたぞ。」そう一言だけ残すと

白銀のマントを翻して、俺の目の前から一瞬で姿を消した。

自分の周りを見渡すと、ヘンテコな服を来た奴らばかりだ。服装だって百合香が良く読む中世の騎士とのLOVERマンスの本の挿絵にある人物が着ているような服だ。よくコントとかで、ド派手な力ボチャパンツの下に白いタイツを履いた足つてあるよな・・・まさに、あれだ。

俺の好みとしては、やはりギリシャ神話に出てくる様な神々の服装の方がシンプルで良いけどな。

現実逃避みたく、そんな事を考えていたら、ヒヤリと冷たい物が俺の喉元に当たつた。射るような殺気を帯びた視線を周りに感じた俺は、じつと銅像の様に微動だにせず、周りの出方を待つた。

俺の前に金の色竜の仮面を着けた男が現れると、そいつの手の中にボックスがあった。

確かに、あの時、俺達は三つのボックスを拾つたんだった。

優太の足下には、銀のボックスで朱と金の模様が刻んであった。

百合香の足下には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであった。

三人が、それぞれのボックスを手にした時に、空から声が振つて来た。

目の前の男が持つているボックスは、俺が手にしていた物とは違つていた。金のボックスで朱と銀の模様が入つているのを俺の前に突き出すと男は、無表情で俺に言つて來た。

「これは、お前のボックスか？」

俺の返答次第で、この俺の目の前にいる男は、左手にいつでも剣が取れる様に手を添えていた。

ちょー待て！

これって俺が正直に答えれば良いのか？

それとも含みを持たせた方が良いのか？

俺の返答次第で、この俺の目の前にいる男は、左手にいつでも剣が取れる様に手を添えていた。

ちょー待て！

これって俺が正直に答えれば良いのか？

それとも含みを持たせた方が良いのか？

悩みながらも、俺は男の目を見た。
切られるかもしれない。

だが、これも俺の人生かも 。

さらば、俺の人生。

そう思ったおれは、ゆっくりと口を開いた。

金のボックスで朱と銀の模様が入っているのを俺の前に突き出すと男は、無表情で俺に言つて來た。

「これは、お前のボックスか？」

「分からぬ。」

男が聴いて來た事に短く答えると男の眉が、ピクピクと動いていた。や、やべー 俺もしかしてこのオッサンを怒らせたのかも知れねーな。仮面を付けた男は、「そうか」と一言答えると俺にボックスを手渡した。周りの人達が輪になつて俺の事を見ていた。どうやら、それは俺にこのボックスを開けてみると言わんばかりの雰囲気だつた。

俺は仮面の男から受け取つたボックスを手のひらに乗せていた。

1～2分待つたが何も起こらなかつた。

ムツとした顔になつた俺。

別に何も変化はない。箱に継ぎ目も何も無いから普通に開ける事も出来ないな . . .

そう思つていた時に俺の頭の中に響いた音楽があつた。それは第九だつた。

俺は、口の端を少し上げて器用に微笑むと箱を人差し指で軽くリズムを取るようiston-ton-tonと叩いた。

第九のサビのところだけ鼻歌を歌いながら、人差し指でボックスの横を叩居てみた。すると手の上にあるボックスが、いきなり右へ左へと揺れ出して來た。周りの人達のざわめきも凄かつたが、俺は一
体この中に何が入つているのだろうかと興味が湧いて來た。
ボックスから出て來たのは、小さな龍だつた。

深紅の瞳をした銀の龍は、俺の事を見ると俺の心に話しかけて来た。

（私を呼び出したのは、お前か。ほう、懐かしいな。龍の娘の血を引く人間がいるとはな・・・。）

どこからか聞こえて来るのか分からぬ声に驚いた俺は、辺りを見渡していた。広いとは言がたいと言つた、暗くて部屋の隅々まで見えない。一体何故、またあの忌まわしい記憶を蘇らせるような事を言つんだ？！「龍の娘の血」封じ込めた幼い頃の忌まわしい記憶。赤い双眸をしたあの男の事を思い出してしまう。心の傷の苦痛に歪む俺の表情を目の前の龍は、物珍しそうに黙つて見ていた。

そんな俺に溜息まじりの龍の声が聞こえて来る。

（こ）私の声は、お前にしか聞こえて来ない。そうだ。私が話しているのは、お前なのだぞ）

田の前の龍にそう言われて、俺は面白いな・・・まるでゲームの世界だ。賢者の石みたいだな。そう思つてると龍の声は呆れたよううに俺に話しかけて来た。

（お前は何者だ？ 本当にお前が私を呼び出したのか？）

周りには、俺が龍とガチで一ラメツコしているように見えていたんだううな。俺は、声に出さなくて良いのなら・・・と思つて龍に心の声で自分の名前を告げた。

（俺の名は優太レオンハルト＝ホワイトウイングナーだよ。何故か知らないけど、姉の百合香と体を入れ替わったみたいなんだ。で、気がついたら此処にいたんだよ。君は？）

（そうだな、お前の好きなように名を付けていいぞ。俺はお前が口ずさんでいた曲が気に入った。）

手乗りの小さな龍に高飛車に言われて、俺はうんと唸るとそのままへと悩んだ挙げ句、第九の英語名である「ロード」に決めた。

（ジョイはどう？あの曲は喜びの歌だし。君が好きならジョイにしてよ。）

名前が決まった途端、龍は、俺の手から消えて俺の目の前に人の姿として現れた。

それは、俺が望んでいた服装・・・ギリシャ神話に出て来るアプロディーテの様な白い神々しい布を纏っていた。

肩に着くか着かないか位に揃えられた真っ黒な髪、俺と同じ灰色の瞳は、光の加減で金にも銀にも見え、雪のように白い肌に映えるような赤い唇は、整った顔を更に神秘的に見せていた。

それを見た周りの人達は「おお～～！冗談、成功でござります」そう口々に叫んでいた。

「ジョイ。気分はどう？君の分かる範囲で良いから僕と百合香がどうして入れ替わったのか教えて欲しい」

俺は、ジョイにそう訪ねるとジョイは、ゆっくりと優雅に俺の前に跪き、俺の目を見てこつと言った。

「それは、あなた様と百合香と言われる方が、自分達の魂を入れ替わる事を望まれたからでござります。そして、それは龍の血を持つ娘が現れたと言つ予言が、当たったと言つ事です」

ジョイに言われて、確かに俺は自分でも一度で良いから百合香のようになんか自分の思うままに行動してみたいと思つていた。

俺達は双児でも、やはり性格は180度違う。百合香は、やはりいつも自由奔放で、好き嫌いが激しい性格だが、彼女の最大の武器はやはりあの天使のような笑顔がキラキラと光つてゐる事だろう。

俺は、いつもそんな皆の注目の的だつた百合香に憧れていた。何をするにしても、百合香はいつも人の目を惹いていた。俺は、百合香と同じ容貌でも、大人しいし従順と言うか、平和主義者だ。下手な争いは好まないし、だからと言つていつも言いなりになつてゐる訳でもない。やる事はやって、言つ事は言つ。ソリソリ

ただし控えめにだ。

相手を傷つけないように。もしかして、百合香はそんな俺になつたかったのか？

いや・・・！ ちょっと待て、確かにこのジョイは、予言が現実に成つたつて言つていたな・・・。それも、龍の血を持つ娘が現れるつて言つ予言があつたのか？！

そんな風に考へてみるとお腹が急に痛くなつて來た。

何なんだ？この痛み！痛みで顔を曇らせると、周りに居た人達は大騒ぎで「誰か！医師を！」そう叫んでいた。

そんな中、ジョイだけが冷静に俺を見ていた。

「力を使い過ぎたんだろう。自分が名乗る名前は決めているのか？」

「な、なまえ？そんなん決まつているだろ？！ 俺は優太なんだから！ そう思つて自分の名前を口にしようとした俺に、ジョイは微笑みながら言つて來た。

「魂と肉体が決めた名前を言わなければ、あなたは死を望む程の痛みをその身に受ける事になる。」

それって、間違いたら俺は死を願うくらいの痛みに襲われるって訳?
どうする?

「ゴクっと生睡を飲んだ俺は、じつと考えた末にビリヤフたら痛い思いを見ずに済むのかと言つ事を考え始めた。

所謂、消去法だ。俺の考えでは、俺の魂は百合香の体に入つて百合香の体には俺が入つていいのだろう。なら、百合香と名乗れば良いのだろうが、俺自身百合香とは名乗りたくも無い。

15年間あれだけやられて來たんだ。

ん？ 聞きたいか？ ならば、聞かせて信ぜよう。

百合香つてヤツはな いつも良いとこ取りで、褒められ、チヤホヤされるのはいつも百合香だ。だから、死んでも百合香とは名乗りたく無い。と言つた屈したくは無い。

あの天使の笑顔の悪魔には！ なら、百合香が嫌つていたあの名前ならどうだろ？ 。

ペトルーシュカかナターリアを捩つてナターシャとか。もじ

死んだ婆さんは、俺の事を特に可愛がつてくれていたな . . . 每日、俺の銀髪の髪を撫でながら、本当は俺にペトルーシュカと付けたかったんだと言つていた。

あの婆さんは、俺に「こんな小さなお前に世界を救う責任を負わせるなんて、神様もなんて酷い運命をお前に押し付けたんだろうね」と言つていたな . . . 。

俺は、その時迄 婆さんが何を言つているのか知らなかつたし、婆さんの言つていた言葉の意味も分からなかつた。

ただ、思つていたのは、百合香と言う双児の姉を持つた俺を不憫に思つていた事なんだろうと確信していた。

悩みながらも俺は、小さな声で自分の名前を呟いた。

鋭い爪で、心臓を驚撃されたような鋭い痛みが、優太を襲つた。

「お、俺の名前なのに . . .」

膝をがくんと着くと、脂汗が額にじみ出て来た。

俺は鋭い刃物で心臓を抉られたような痛みが、急に襲つた胸を拳で押さえると、鈍痛な痛みに止りがちだった呼吸を整える様に、ゆつくりと息を吸い込んだ。

胸の痛みが治まつた頃、また別の名前を呟いた。

「ペトルーシュカ」

今度は、剣山で心臓を潰されそうな苦痛が俺を襲つた。余りの胸の痛みに立つていられなくなり、とうとう俺は座り込んでいた。

百合香の名前もダメだつたか . . .

名前に殺されるなんて . . . そんな馬鹿な事があつて良いのか？ よく、婆さんが言つていたな。

名は体を表すつて . . .

「優太の本当の名は、世紀末と恐れられ人類を闇の恐怖へと落としてしまつた我が儂な人間達にとつて、最後の希望の光となるんだよ。それがお前に『与えられた使命。』」

小さい俺は、婆さんが言つている意味なんて、分からなかつたが、俺にとつてもとても大事な事を言つているのだろうと、幼心にも婆さんの皺くぢやな手を握り、目を輝かせて婆さんの話を聞いていた。ゴラゴラとロッキングチェアに、体を凭れさせると、小さな俺を抱き締めながら言つていた。

「人々はお前に平伏すじやうつ。平和を願うお前を天使か神と呼んで。どんなにお前がその名を嫌がつても、それはお前の血が . . .

この銀の髪と瞳が覚えていいんじや。名に殺される前に、自分の使命を思い出すんじや。」

薄れ行く意識の中で、俺は最後の望みをかけて、名前を呟いた。
もし、またこれも体と魂に拒否されれば、俺はもう死ぬかもしけない・・・。

「ホープ エンジール」

俺の言葉が文字となつて空間に浮かぶと、クルクルと俺の周りを回り出して眩い金色の光を放つと、光は粒子に変わって俺の頭からつま先まで万遍なく降り注いだ。ジョイはその光景を田を細めて見ていた。

「あの時と同じだな。ホープ」

ジョイは、形の良い唇の両端を少し上げて微笑むと、意識を手放して石畳の床に倒れているホープを見ていた。

優太の憂鬱？ 正しい起^レし方

さわさわと俺の髪が、風に弄ばれていたようだ。

さつきまで、俺は自分に新たな名前を付ける為に文字通り死ぬような苦しみをこの身に受けた。

ジョイが言つていたように、もし俺の名前が魂と体に受け付けなければ、死ぬと言われたが、本当に死ぬかと思った。

「 あら ． ． ． 」

誰だ ． ． ？

母さん達は、海外に居るから、この声は違うよな ． ． ． この声は母さんよりも少しだけ低い声みたいだ。まるで百合香みたいだな。

「 めん ． ． ． 百合香 ． ． ． 今朝の食事当番つて俺だつたよな ． ． ． 今作るから ． ． 」

寝ぼけ眼で、ベッドから降りると台所へ向つ為に使う階段に向つ俺。

いきなり、俺は顔面を石造りの壁に激突させていた。あまりの痛さに、俺はしゃがみ込んで唸つていると、「まだ寝ぼけているのか？」呆れ顔で俺を見ているジョイが居た。

「此処 ． ． ． ああ、未だ夢の世界だつたんだな。じゃあ、また眠るからお休み～」

俺がまた眠りの森の住人になろうとしていた時に、ジョイが「お前の名前は何だっけ？」そう言って来た。

俺は、眠気眼で自分が日本に居た頃に使つていた名前を言つてしま

つた。

『名前？ 何寝ぼけてんだよ～』

寝返りを打つ俺の髪を指で梳かしてくれるが、風呂にもシャワーにも入っていないから、纏めてんだよな・・・。クイクイとたまに髪を引っ張られる感じが心地良い。

俺って、もしかしてM?って思う程、あまりの気持ち良さに眠りに着きそうになつた。

そんな俺にジェイはもう一度聞いて来た。

「お前の名は？」

「う～ん。 優太だ・・・よ!! ウ!!! い、痛い!!」

心臓をデカイ鈍器で殴られたような痛みが、俺の体に走った。もしこれがただの痛みではなくて、本当にこんな事を実際にやられていたら、俺は何度死んでいるんだろうか？

胸を押さえながら、のたうち回っていた俺。

「あ。俺の名前に殺される・・・」

あまりの痛さに俺はベッドから転げ落ちると、七転八倒していた。薄らと目を開けると、黒髪に灰色の瞳をした美形の女が俺の目の前で仁王立ちしていた。

普通、女が仁王立ちするのって、ダンナとか彼氏に浮気されたときなんだよな・・・。俺は、浮気なんてしないし、それに彼女なんて居ないから、こんな美人に仁王立ちされる覚えはないんだけどな・・・。

大きく伸びをした俺は、きょろきょろと周りを見渡すとまだ外は薄

暗かった。一体何時に俺を起こしたんだよ！
むつとした顔でジョイを睨むとジョイは、寝ぼけるお前が悪いと言つて來た。

窓の外は、不思議な景色が広がつていた。

異世界に居る事は、分かつていただけど此処まで違うとは思わなかつたのだ。

「すつげー。月が一つ出でこるよ。ジョイーこれって普通なの？」

まるで双児のように月が上トに並んで出でていた。月自体、日本で見た月と変わらなさそうだが、銀色の月と金色の月がまだ暗い夜空にぽつかりと浮かんでいる。

風が、まるで銀の蜘蛛の糸の様に風の流れが見える。幻想的な世界だ。その風の糸も、目を凝らしてみると、小さな小さな龍の妖精達が、これまたチビチビとした可愛い銀色の羽を広げて飛んでいるのだ。

もしかして、地上でよくダイアモンドダストが発生すると、巨大な樹木でも倒してしまつて言つのは、こいつら……風の精達の事を言つてているのか？

手を窓から出すと龍の妖精達が、俺の手に纏わりついて来る。俺の手の上に乗つた彼らは、俺に対して頭を垂れ、そして小さな銀の羽を広げてお辞儀をしている。

俺は、それを見てにっこりと微笑むと彼らは、銀色の顔に薄らと紅を差したように顔を赤くした。それがまた綺麗だ。

彼らをまた、空へと放つと小さな羽を懸命に動かしながら、右へ左へとヨタヨタと飛んで行く。いつの間にか小さな竜の妖精達は、銀の蜘蛛の糸の様な風の流れにやがて変わつて行つた。

男の俺でさえもつゝとりして來た。

男・？ そういうや、俺の体つて……百合香の体なんだけ
ど……。風呂とかどづするんだ？

そんな事を考えていると、ジョイが咳払いを始めた。

「どうやら、俺に何か言いたそうだった。

俺は、ジョイの方を見ると、にっこり微笑んだ。これぞ百合香の得意の天使の微笑みだ！

ま、俺は百合香じゃないから、どんな笑顔になつていてるかは、分からんがな。

ジョイは、俺の笑顔を見ると固まつていた。

え・・・。結構、笑顔には自信があつたのにな・・・。一人でシヨツクに打ち拉がれないと、ジョイは肩を震わせて笑つていた。

「お前つて、面白いヤツだな。龍の血を持つ娘つて聞いていたから、もう少しツンケンしたヤツかと思っていたが、これなら楽しめそうだな。ホープこれに早く着替えるんだ。もうすぐ始まるぞ」

「はい？ 楽しめる？ ツンケン・・・？ それつて、もしかして百合香の事じゃないのか？」

そんな事を考えながら着替えをしていた俺は、はつと気がついた。

「この衣装つて、司祭の衣装みたいじゃないか！ 何でなんだ？ 俺のGパンは？ Tシャツは？」

辺りをキヨロキヨロして自分の洋服を探していると、ジョイが俺の手を引いて部屋の外に出た。

何も答えてくれないジェイは、俺でもうつとりするような灰色の瞳で俺に流し目を寄越して來た。そういう、ジョイの性別って何だろうな。

男か？ それとも女か？

今、後からそれを確認すれば、きっと俺はこいつから蹴りを入れられそうだな・・・。

俺は、考え事をしながら歩いていると急に辺りが寒く感じた。

あまりの寒さに、思わず身震いをした俺は、上を見上げた。

だってさ、寒いって言つのは吹き抜け天井がある所だしな、どれだけ吹き抜けてるのか見てみたいと思つたんだよ。

でも、それを見た時 俺は自分の知識に寄つて蹴りを入れられた気分になつた。

まるで東京ドームのようなただつ広い円形の間は、壁も床もそして延々と続く螺旋階段さえも、全て石造りなのだ。

その螺旋階段が終わりを告げる先と思いし場所は、一筋の光が見えて来る。あの場所らしい。

まさか、コイツは俺にこれを上れなんて言わないよな . . .

この高さって、東京タワーよりも高いじゃねーかよ！ 確か東京タワーの高さは333メートルだつたよな 石段の一つの大きさが大体30？の高さとして、一周回つているこの螺旋階段の段の数が、50段。それがざつと数えて200周以上ある か、考えたく無い

婆さん . . . 俺やっぱ帰りてーよ。平和な日々に。例えモッチーにイジラレテも良いから、帰りたいよ平和なあの日々に

俺の目から不安と言う涙が溢れる。

石畳の廊下を歩いて行くと、石造りの螺旋階段を上って行った。どこまでも続く螺旋階段を息切れしながら、俺は恨めしそうに見ていた。

一周ぐるりと回る螺旋階段を上のだけで、東京タワーと同じ高さなんだと思うと、足が竦んで来る。
ここから、落ちたら俺は・・・死ぬ。

それも確実にだ。

まだ朝食も食べていないのに、こんな激しい運動をさせるのかよ・・・

俺の前を歩いているジョイは、息切れ一つ起こしていない。一体どんな体の作りをしてるんだ？と不思議に思ってジョイの足下を見てみれば、浮いている・・・。

「えー！！！ 何で？ ビリして、ジョイは浮いてんの？！」

思わず俺の高い声が螺旋階段のホールに木霊している。ジョイは、俺の驚いた顔を見ると黒髪を少し乱れさせた白い顔から、金色の双眸が俺を捕えた。

反対に溜息まじりで呆れ顔を見せる俺に言つて來た。

「お前も、自分の力を使えば浮遊出来るんだ。やううと思わなかつたヤツが悪い」

ジョイにそう言わると俺は目を瞑つてロケットの発射台をイメージした。頭の中で発射までのカウントダウンが始まった。（10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、発射！）俺の足下から大量の水蒸気がモクモクと上がった。そして次の瞬間、俺の体は矢より

も早く光と同じ早さで、このホールの最上階へと飛んで行った。次の瞬間、俺は勢い余つて塔の最上階の壁を壊した。

俺の様子をただ黙つて観察していたジョイは、次の瞬間驚きと共に今度は、彼の声がホール内を木霊して行く。

「嘘だろ！？」

俺は、美形のジョイの驚く顔を見れて本当に嬉しかった。それと同時に俺の目の前に居る天使のような羽を付けた人が立つていた。その人の羽は、虹色に輝いていた。男なのか女なのか分からないうが、まるでギリシャ彫刻のように整つた彫りの深い顔立ち、そしてしなやかそうな手足には、最低限の筋肉がついていた。

俺は、ついその人の胸に両手をひとつと当てる「本物？」そう呟いた。

ジョイが俺に追いついたのは、俺がその人の胸に手を当てている所だった。

その時のジョイの表情は真つ青から真つ赤に変わつて行つた。

（ジョイの顔色つて、カメレオンみたいに変わるんだな）

そんな俺の思考を読んでか、ジョイは、俺に「お、お前、神様に何て事をするんだ！」そう言つて俺の手を神様と呼ばれる人の胸から離した。

「え？ だつて、男か女か分からなかつたから、だつてさて股とか触つたら悪いだろ？ んなら、胸の方がまだ良いんじゃねーの？」

そう言つて来る俺の頭を後から、手でペシッと叩いて来るジョイ。ジョイつてば、何だか関西芸人みたいだな・・・。あのドッキ漫才夫婦の様な感じだ・・・。

「コイツにハリセンを持たせたら、右に出るヤツは居ないかも知れないな・・・。
神様と呼ばれた人は、そんな俺達の事をずっと微笑みながら見ていた。

「良いのですよ。ホープにも考えがあつての事でしたからね。どうですか、性別が分かつて満足しましたか？」

俺は、コクコクと頷くと神様つて両性だと思つたんだけど、女だつたんだ・・・。知らなかつた。

まじまじと俺は自分の手のひらを見つめると「一二一二」とさつきの感触を思い出せるように手を動かし始めた。

そんな俺の行動なんて分かつていますよとばかりに、ジョイが俺の手を掴むと神様にこれから俺の身の振り方を聞いて来た。

この異世界で、この神様は俺に何を求めているんだろう・・・。

俺は、この神様の希望を叶えてやることなんて出来るのかな・・・。
不安になりながらも、俺の隣で俺の手を掴んでいるジョイの横顔を見ていた。

浮遊していた時は、金色だった瞳も今は、灰色に戻つている。
どうやら、瞳の色は、力を使う時に変わるらしいな・・・。

「ホープエンジェルよ。お前に使命を「与えよう」

神様の優しい声が空に響き渡る。俺の使命とは、何だ？！

優太の夢想？ 使命（後書き）(あきまき)

お調子者のホープ（優太）です。

優太の憂鬱？ 第一回目（改）

俺は、自分の為に用意された部屋に戻ると「口リと横になつた。元は男なので、ドレスの裾が太腿まで捲れ上がつても何とも思わなかつた。

早く朝になれと。

夜明けと共に俺とジェイはこの奇妙な神殿から旅立つ事になつた。俺の頭の中では、昨日神様に言われた事、そして教えられた事がグルグルと回つている。

そんな俺の思考を読んでいるのか、ジェイは、「氣にするな。お前の所為ではない。お前の血が齧した事だ」と俺を慰めているのが、それともケン力を売つてているのか分からぬ事を言って來た。

昨日、俺は神様に言われた。それは普通では信じられない話だつた。

神様の話に寄ると、俺はガーディアンである百合番とそしてトオルに会わなければいけないらしい。そして国々にいる他のガーディアンと接触しなければならないそうだ。

そして、まず2人に会えたらエルドラードと言つ国に行くようになると言われた。エルドラードと隣接する国エルドラレッドと言つ国の中には死の谷があると神様が話してくれた。

そこには、龍の血を喉から手が出るほど欲しがつてゐる奴らがウヨウヨいふと言う事も言われた。神様から、俺への忠告は決して、甘やかしたよつた優しい物では無かつた。

「もし、君の銀髪で銀の瞳が他の人達に見られたら、すぐに君は捕われて、血を抜き取られちゃうよ。君の血は、一滴でも彼らに取つ

ては一生分の給料となるくらい、貴重な物だからね。だからと書いて、誰彼構わずに、自分の血を人に上げる事は出来ない」

神様は、俺の心を読んでいる！？

俺が、人助けをするんだから、少しいや、一滴くらいの俺の血をその貧しい人達に上げれば、喜ぶんじゃないのかなんて思つちましたから。。。

神様の優しく大きな手が、俺の銀髪を撫でている。

「ホープは、優しい子だね。だけど、君の優しさはたまに人を傷つけてしまう時があるんだよ。その人がそれを望んでいない時もあるからね。それに、君の血は平和を望む者には、平和を与えるが、破壊を求める者には、世界の破壊を与えてしまうんだよ。それが例え立派な神官としても、彼らに一欠片の欲望があれば、君の血はその欲望を増殖させ、世界を破滅に追いやるんだよ。君の血が一度盗まれた時に、君の世界で何が起こったか知っている？」

ホープと呼ばれた時に俺は、自分の両肩をピクンと震わせた。もう、僕は優太として両親や友人達そして百合香からも呼ばれる事はないのか？ そう考えたら、悲しくなつて来た。

ようやく、百合香を守る為に同じ高校に入れたのに・・・。何でこんな所に飛ばされなきやなんねーんだよ。

そんな事を考えていた時に、神様は俺と百合香が幼い頃 誘拐され、俺の血が深紅の双眸をした男によつて盗まれた時の事を話始めた。そういうや、あの後つて一体世界で何が起こったんだろうな。百合香はあれ以来、男嫌いにはなるし、俺の事を邪見にするようになつたから何があつたに違いない。

俺は、知らないと神様に頭を振ると神様は俺を泉の前に連れて行つた。

「覗いてご覧。あの時の事が見えて来る筈だよ

泉が濁つていて見えねーよ。田をゴシゴシと擦つてるとフフフと神様に笑われた。

「濁つているのは、泉ではなく君の心です。眞実を見るのを怖がつている君のね」

神様の指が泉に触れると泉の水面が波紋を起こし始めた。うねうねと景色が揺れる水面と共に見えて来る。

あれは、5才の春のあの日。深紅の双眸をした男に連れ去られた俺達を小屋に入れて、初めに百合香に手をかけようとしていた。百合香の髪を触った途端、百合香の髪が銀髪から金茶毛に変わると男は舌打をして「チツ！ガーディアンか。」憎たらしそうに百合香の方を見て言つていた。

今度は俺に近寄り、俺の銀髪を触ると何も変化がないのを見て二ヤリと笑つた男は、子供の俺の細い腕を掴むと呪文を唱えてナイフを俺の手首の上で踊らせるようにしていた。俺の血を蒼い小瓶に入れると男は消えた。

その後、泉の景色は他の国の景色となつた。俺を誘拐して血を採つた男が其処に立つていた。

立つていたと言つよりも、浮かんでいたのだ。男は俺の血を一滴空から垂らすと、その国は、一瞬で炎に包まれてしまった。男はそれだけじゃ物足りなかつたのだろう。俺の血から兵器を生み出すと次々と最新鋭の爆弾が製造されて行つた。

男は狂つたように笑いながら、「これさえあれば、俺様はこの地上の . . . いや全宇宙の支配者に成れるだろう」男の姿は霞の如く消えた。

俺は、後には神様を振り返つてみて見ると神様は複雑な表情を

していた。

どうやら、あの霞の如く消えて行つた男は、この世界の人間らしい。そして泉が光るとの世界での戦争を映し出した。自分の欲望に飲まれ行つた深紅の双眸をした男は、7つの大国を自分の手中に手に入る為に、大国の王達に無理難題を吹つかけて來た。

男はカシュミール、パハスカ、エルドラード、エルドラレッド、フオルサム、バスカール、ジルギスにそれぞれの第一王女を自分に差し出すようにと言つて來た。

カシュミール以外の国からは、第一王女の替え玉を差し出していた。男はそれに気付く事なく7人の王国から人質という最高の妻達を娶つたと言う優越感からか、酒を姫達に注がせた。

カシュミールの第一王女であるミシュカは、男が完全に酔つぱらうと眠つた頃を見計らつて龍の血が入つた小瓶を男の懐から盗むとそれを床に叩き付け破壊した。

床に零された龍の血は、赤い煙と共に現れた銀色の巨大な龍が空中に出現した。そしてミシュカを見下ろすと「お前の望みは何だ?」そう聞いて來た。どうやら、このミシュカ姫には欲望も何も無かつたようだ。

彼女は、「この男に永遠の罰をして、この世界に平和を下さい」そう言うと銀の巨大な龍は大空高く舞い上ると建物の中で、いつの間にか目覚めていた男に向つて落ちて來た。龍は、男を口に銜えると地の底に消えて行つた。

空一面に覆つていた暗雲も、いつの間にか晴れてきた。ミシュカ姫が空を見上げると青空には大きな七色の虹がかかっていた。その虹の中から先ほどの龍が現れるとミシュカ姫に予言を告げた。

「いつの日か、竜の血を持つ娘が此処に現れる。その時に世界はまた困難に陥るだろ?」

「その者はどうして、この世界に来るのですか？何故？」

竜は答えなかつた。

「そなたに7つのボックスを授けよう。それぞれに役割がある。7つの国に名前があるようにな」そう言つと竜は消えて行つた。

「どうやつて、その娘を捜すのですか？！」

ミ「月の光をその身に纏つたように、流れるような長い銀の髪をし、平和を願うミシユカ姫・・・其方のような銀の双眸を持つておる。その者が現れし時は、この世界が破滅へと向つてゐる時じや」

シユカの問いに竜は、稻妻のように空に声を響かせると、虹の中へ消えて行つた。

ミシユカ姫に連れられて、それぞれの国から連れて来られた7人の人質達は、自分達の国へと帰つて行つた。

ホープは、肩を震わせながら自分が此処へ連れて来られた意味を知ると、神様の服にしがみついて泣き出した。争う事が嫌いで、どんな面倒な事にも時間をかけて分かり合おうとして来た自分の存在が、人を世界を狂わす事になるなんて・・・。

ホープの両肩を持つた神様は微笑みながら、ホープの両頬を両手で軽く挟みながら持ち上げると、まだホープの銀の双眸からポロポロと零れ落ちて来る涙を拭つてやつた。

「ミシユカ姫の時代からもう、2000年の時が過ぎたんだよ。今この世界は、彼女が望んでいた平和からかけ離れ、7つの大国は、内戦、混乱が起き、戦争が始まつたんだよ。もうこの世界の終わりに近づいて来たんだ。それを知らせる為にホープ、君をこの世界に呼んだんだ。もし、君が自分の眼で見てまだこの世界も捨てた物で

はないと確信した時、君の力である血を使いなさい。もしも、その反対であっても使うのは君の血だよ。全ては君の心次第なんだ。その為に私の力を示した竜ージョイを君に使わせた。さあ、世界をその目で見て来なさい」

でも俺はその時まで知らなかつたんだ。

俺の血を使った戦争が、他にもあつた事など。神様は俺が傷つき、俺がこの役目を放棄するかもしれないと思つたらしく、俺にはもう一つの残酷な映像を見せなかつたのだ。

そんな事は、俺は露も知らず、神様の顔を見た。

「では、行つて参ります」

少しだけ付け加えたり、直したりしました。

神様の言葉に驚きながらも、白い眩い光はホープとジョイを優しく包み込んで行つた。

輝く巨大なシャボン玉の中に2人は入れられ、ゆっくり地上へと下ろされた。

ホープは、自分の長い銀の髪を束ねると頭巾の中に隠した。瞳はジョイに頼んで蒼い双眸に変えてもらつた。

ジョイが言うには、「ホープ。自分の力を使う時にだけ、其方の瞳の色は変わるから、気をつけろ」 そう言うと俺の目を伏せさせた。瞼にゆっくりと触れられるジョイの温かい唇の感触に、俺は少しどキドキした。

俺はふと気がついた。何で俺って女なんだよ。別に男でも良いじゃんか！

そう思つていたら、ジョイからこの世界に伝わる昔話を聞かされた。

遙か昔、人は神になろうとして禁断の罪を犯した。

その時代には、人間は沢山居たが、皆それぞれの役割を持つて生きておつた。

そんな平和な時代に、人は初めて禁句を犯してしまつ。禁句ーそれは、禁断の果実と呼ばれる「龍の実」を食べてしまつた女から始まる。

女は、美しく賢く誰からも好かれる人間であった。

その時代の神と言われるトステーべ神にとても愛された女であった。女は月の光をその頭上に纏わせたような、長く艶やかに光る白銀の髪をしていた。その不思議な髪と同じ色であった瞳は、銀色であった。

その頃の人間達は黒髪、黒目の者や、茶髪に茶目、または緑の目、

金色翠目や青目の者が殆どであった。その時代に、この女の姿や銀の髪、銀の双眸は異端であった。

だが、女は人を愛し、平和を愛していた。

ある日、女は喉の乾きに我慢が出来ず、禁断の龍の実を食べてしまつた事から、その体の中に龍の血を取り入れた。

それは、女を手に入れる為に、男達が戦いを始める切っ掛けとなつた。瞬く間に世界は荒れ、女は神から罰として、その龍の血を持つ者は、全て男として産まれる事になつた。その龍の血が、また争いごととして使われないようにする為だつた。

時既に女はその胎の中に子を宿していた。

「どうか、トステーベ神、どうか。この子だけは私から取らないで下さい。この子の命だけは・・・」

縋る様にトステーベ神に願う女に神の大きな御手は、女の胎へと行くと白く光つた。

神は、女に告げた。龍の血が何代かに渡つて、お前と同じ純粋な龍の血になる時は、星の数ほどに広がるお前の民の中から、産まれて来る子孫達の中の一人、または2人だけ、完全なる純粋な龍の血を持つ者が現れるだろう。その者は、生まれながらに銀の髪を纏い、灰色の瞳を持つ、利発な子供となつて世に出てくるであろう。

その者は、お前の魂を持つ者だ。お前は、これから三度、自分の呪われた血で世界が火の海へと変わつて行く様を見る事になる。それがお前への罰だ。

女よ、お前は代々、その龍の血を横しまな者達から守れ。

女は震えながら神に訴えた。

「どうやつて、その龍の血を持つ子供が産まれた時に、私の子孫達が守れましょうか？」

神は、その者が産まれし時、一つの命と一緒に出て来る。一つは純粹なる龍の血を持つお前の魂が入った子供とそしてその者を守るべきにして産まれた子供だ。

その話を聞いているうちに、何だか俺つて貧乏くじを引いているような気がするつて思つたよ。結局、一昔前にやつた自分の過ちを今の俺に尻拭いしろつて、そう言つ意味なんだよな・・・。身に覚えがない事だけど、昔の自分がやつてしまつた事に、怒りを感じた。

「なあ、ジョイ。そういうやつ俺が居た世界でもあつたよな・・・。ドーランフルーツって言つのが。もしかして、それつて龍の実なのか？」

禍々しいようなショッキングピンクの果実。何処をどう見ても『食えるもんなら食つてみな!』ってケンカを売つているような果実だ。

ジョイは笑いながら俺の頭を撫でて来た。

「違うよホープ。あれは、たまたまそれを発見したヤツが付けた名前だ。龍の実は、あれ以来 誰も見つけてはいないし、実りもしない。お前が食べてしまつたからな」

「ジョイ。お前、俺を慰めてるのか?それとも、俺の古傷に爪で引っ掻いて塩を塗つているのか?どっちだよ」

「そうですね。両方です。大体、ホープが食べたからいけないんですよ」

コイツに向つても、墓穴を掘る事にしかないと分かつた。

俺は、神様に貰つたこの世界の地図を広げると赤い雲の首飾りを地図の上にそっと置いた。首飾りは、ひとりでに動くとエルドラレッドとエルドラールードの間にある死の谷の近くで止つた。

あちやー。どうやら俺達が舞い降りた場所が、其処らしいな・・・。
よりに寄つて死の谷だとはな・・・。

苦笑しながらも、ホープは首飾りを着けると赤い雲を服の下へ隠した。

自分の勘だと、この雲は俺の血の可能性が高いからな・・・。気をつけねば・・・。

ジョイと共に荒れ果てた荒野を歩き出した2人。

目の前に広がる荒涼とした大地には、木どころか、草一本も生えていない。

空に浮かぶのは灼熱の太陽が三つ。一つで良いだろ！一つで！それが三つも出でているから、暑さも三倍だ。

フラフラになりながらも歩いているとジョイは凄く元気そうだ。何しろ自分の足で歩いていないからな。それを知ったホープは、大きく溜息をつくと頃垂れた。

「はー。馬鹿正直に、歩いていた俺が馬鹿なのか・・・。それなら、新幹線で一気に此処を突つ切らうぜ！」

頭の中のイメージは、東京駅！新幹線が入つて来た所を想像して、頭の中で出発の合図である音楽が流れる。ファン！と言う発車音と共に、ホープの体は矢のように早く荒野の彼方へと消えて行つた。ジョイは、それを見て呆れた顔をしていた。

「アイツ馬鹿か？あの荒野の先は、谷だつて言つのを忘れているだろ？」

次の瞬間、地響きのような音がすると、二つの頭を持った禿鷹達が群れをなして空へと舞い上がりつた。ジョイは苦笑しながらも、「アイツは面白いヤツだ」と咳くとホープの元へと向つて行つた。

砂埃と一緒にド派手に地上にランディングしたホープは、顔を地面から引き上げた。

「信じられー。俺まだ生きてるなんて・・・」

普通なら、死んでいるんだろうな・・・。俺はかすり傷も無い。フラフラと立ち上るとバタバタと砂埃を払った。

ペツと口の中に入った砂を吐き捨てたホープは、咳くと口の中がジヤリジヤリした砂の粒が歯の間に入ってしまった事に、気がついた。周りを見渡しても噴水や水道などと言う物はない。

井戸も無ければ川も無い。 口を濯ぎたいがどうすれば良いのか迷っていた。その時にホープの頭の中でピカンと豆電球が光った。魔法で地下水をくみ上げれば良いんじやんか。もしそれで、ここの中が潤えば、死の谷なんて呼ばれずにパラダイスって言う風に呼ばれるかも知れねーしな。ケケケ 变な含み笑いをしていた。

初めは、自分の血を使おうかと思っていたが、神様に言っていた事を思い出した。

「ホープ。お前の血は、一滴がこの世界で暮らす人の一生懸かつて出すだけの給料と同等分の価値があるのだ。使う時には、必ず気をつけるのだ」

ホープは首を傾げると自分の手を見つめた。

青空にギラツク三つの太陽を睨みながら、自分の手のひらを太陽に透かしてみた。

自分に流れる血が、人々を狂わせるんだと知らされた時に、ホープは自分の頭の中に一番先に浮かんだのは、姉の百合香だった。

あの事件から大人しかった百合香が、凶暴と言えるくらいに自分に對して冷たく当たつて来たのは、全て俺の血の所為なんだ．．。

俺は、深呼吸をして両手をパンと音を立てて合わせると、地面に

両手を着いた。

魔法陣など描か無きやならない事など知らなかつた俺は、頭の中で念じるだけ念じていた。

すると、何も無かつた岩と砂の大地に、ポオーッと淡い鬼火のよくな光が浮き出て来た。

初めは、俺の周りから薄らと少しづつ出て来た鬼火が、大円と小円を幾つも混ぜ、見た事の無い奇怪な文字が所々に浮き出て来た。俺は、本能が示すまさに水を求めている事と、この砂漠地帯を緑豊かなオアシスに変えたいと願つた。

俺の魔法つて、何処まで出来るのかなんて俺自身わかんねー。

だけど、クヨクヨ悩むよりも、此処が自然豊かな土地になれば死の谷みたいな、ベタでダークな名前は無くなる。

ニヤリと笑つた俺は、右手の人差し指に魔力を集中して溜めると、一滴の血を出させた。

俺の血は、小さな宝石の粒となつて魔法陣の中心に落ちて行つた。
ポチヤン・・・・・。

血が魔法陣の中に落ちた後、波紋を描く様にうねつてくる。

俺の周りにいつの間に居たのか、風の精靈や水の精靈、火の精靈、森林の精靈達が不思議そうな顔で俺を見てる。

よく絵本とかで出て来る様な、小さな精靈ではなくて、背丈も俺と同じか、それ以上だ。見てくれば不細工な精靈などいない。男なのか女なのか分からぬ、中性的な感じだ。

水の精靈は、アルブルと自分で名を名乗つて来た。

水色のドレスを着てゐるつて事は女のだろつ。髪は黒で長くしっとりとしている。

瞳は藍色だ肌の色は白い。アルブルが空中に舞う度に、水が何処か

らとも無く水しづきとして俺の顔にかかる。

俺がここに泉を作りたいと言い出すと、アルブルは不思議そうな顔で言つて来た。

「あなたの口の中にある砂を取るためだけなら、その腰に着けてい
る革袋一杯の水でも良いんじゃないの？」

確かに、言われてみればその方が良いかも知れない。だが、俺は自
分だけが満足するわけにはいかないんだ。

「俺は、自分で満足すれば良いって言つヤツじゃないんだ。ここ
は、草も木も生えない不毛の土地。そんな土地に迷い込んだ他の人
の為に作りたいんだ。ここは、死の谷だろ？それをオアシスにした
いんだよ」

水の精霊アルブルは、腕を組むと面白そうに俺を見つめている。

「あんた、変わっている。普通、人間、我が侶」

「だろうな・・・俺は苦笑しながらも、アルブルが言つてている事
に理解を示す。

「そういや・・・よく百合香にも言っていたっけ、俺が小さい頃は
泣き虫で虐められっこだったから、百合香が「どいつも虐められた
の？私が、捩じ伏せてやる！」そんな事を言つて来たから俺は、い
つも「百合香・・・ケンカはケンカしか産まないんだよ。だから、話
し合いで済ませたいんだ。俺を殴つた方も何か事情があつたんだよ。
俺はそいつの本当の痛みを知りたい。そして取り除いてやりたい」
そんな事を言つと、百合香から「ダメ優太。あんたはお人好しで
変わつてているわ。そんなんだから舐められるのよ」呆れられていた
な・・・。

俺は、争いたく無いんだ。人を傷つけたく無い。だから相手の気持
ちになつて行動する様にしたんだ。

水の精霊アルブルは、俺の考えを読んだのか、肩を竦めると歌を歌い出した。

その歌が文字となつて現れ、光る淡いブルーの色に輝くと驚いた事に、荒涼とした大地から少しづつ砂煙が上がりつて来た。土が何かに押される様に固い岩をも押し上げてくる。じわじわと地面が湿つて来ると地下水が湧いて出て来た。

大きな泉が出来て俺は嬉しかつたが、これだけではまたすぐに泉は枯れてしまうだろう。

ならば、泉の元となるような森を森林の妖精に作つてもらうとするか、俺は、森林の精霊に近づくと「此処に森林を作つて欲しい」と願つた。

森林の精霊はサダルーナと名乗つた。コイツは男なのだろうか？ 緑色のリクートースーツ姿。結構カッコいい。切れ長の瞳からは深い緑色の双眸が、こっちを見ている。薄い唇から発せられる言葉はただ、己の名だけ。どうやらこのサダルーナは、シンデレラさんのか、それともただの人見知りのイケメンなのだろう。薄い緑のマントを身に纏つて、俺を見据えている。

サダルーナは、何も俺に聞かずにただ俺が願つ森林を泉の周りに作ってくれた。

火の精霊は、フラー。赤毛のお下げ髪をした可愛い子だ。

顔には愛嬌と言つようなそばかすがある。瞳は茶色で美女と言つよりも、美少女とか言つた方が良いのだろう。とにかく屈託の無い笑顔が可愛い。5才の頃の百合香を思い出させるほど、笑顔が愛らしい火の精霊は、フワフワの朱色のドレスを身に纏つている。

風の精霊は、ズーラトラと名乗ると消えて行つた。彼は、サダルーナと同じようなスース姿だった。ただ違うのが彼の瞳の色が、俺の血の様に紅い。それは、あの時の誘拐犯を思い出してしまつ程だ。風の精霊ズーラトラは、俺の思考を読んでいたのか、黙つていた。

四人の精霊達は、俺にまた何か願い事をしたい時は、我々の名を呼

べと言つて來た。

俺は、砂だらけとなつた口の中を灌ぐために、泉の水を両手ですくうと灌ぎ出した。

砂だらけになつた服を脱いで赤い雫の首飾りを首から下げる、俺は泉の中へ入つて行つた。

ゆつたりと泉に使つてゐるととても気持ち良い。
ぱちや . 。ぱちや . 。と泉の中で身を任せて泳いでいると、ジョイが物凄い勢いで走つて來た。

優雅に水に漫かつてゐる俺を見て、指を指して來た。

「おい。ジョイ。指差すのは良く無いぞ」

それでも指を指してゐるジョイ。

もしかして、差してゐるのは、俺じゃなくて、俺の後なのかな？
ふとそう思つて俺は、自分の後を振り返ると巨大な黒い影が俺の後
に立つてゐた。

これつて、よくファンタジー世界でよくあるヤツ？

巨大なナマズが俺の前で立ち泳ぎしてゐた。

急いで岸まで泳ぎ付こうとするが、慌ててゐる所為もあって上手く
前に進まない。それどころか、巨大ナマズは俺を見てニヤリと笑つ
た。（目が光つてゐたから、笑つたんだ！）

大ナマズは、いきなり大きく口をパカッと開けると俺を吸い込もう
として來た。

「うわー！ ナマズ！ ナマズ！ 俺魚類ダメなんだつてばー！ 特に、ナ
マズはヒゲが付いてゐるだけで、嫌なんだよー！ 誰か助けてー！」

俺の甲高い声が青空に響き渡つた。

その瞬間、大ナマズの額にグサリと刺さつてゐる一本の槍。
後一步の所で俺は、大ナマズに食われそうになつてゐたから、この隙に急いで泳いで逃げてゐるが、運が悪い事に、俺の足が . . . こ
むら返りを起こしやがつた。

腰も抜けてしまい、俺の体は泉の中へと引きずられる様に沈んで行つた。

泉の水の中から見える太陽は、幻想的だ。

ゆらゆらと揺れる三つの太陽が、薄い緑色に見えて来る。息も苦しく無いから、俺・・・・もう死ぬんだな・・・なんて冷静に考えてしまつた。俺の背中が、泉の深い底の砂地にやんわりと当たると、俺は静かに目を閉じた。

もう疲れた。こんな呪われた血なんて無い方が、この世界の人の為になるよ。きっと。

俺は誰も傷つけたく無いし、俺も傷つきたく無い。誰にも哀しんで欲しく無い。なら、いつそ俺がこのままこの泉の奥底深くで眠つていれば良い・・・・。

薄れる意識の中で、誰かが俺の腕を引っ張つて居る感じがした。泉の中でも、月の様に光り輝く僕の銀髪が、水面に向かつて揺れている。

綺麗・・・・。

唇に当たる柔らかな感触・・・。

何度も何度も息を吹き込んで来る。

ウ・ウゲッ！

喉に詰まっていた水を吐き出した俺は、薄らと瞳を開けた。

俺の目の前には、ジョイではなくて見知らぬ男が俺を解放してくれていた。

ぼんやりとした頭を一気にフル回転で起動させると、僕は自分が何も身に纏つてい無い事を知つた。

僕が、身につけている物は「紅の雲」を首から下げてはいるだけだ。

つまり、素っ裸なのだ。

僕は恥ずかしさのあまり、自分の両手で胸を隠すと、俯いて目を伏せた。

男は、俺に自分のマントを羽織らせると、立ち去りつとしていた。

待つて！と言おうとしたが、砂も水も大量に喉の奥深くか肺にまでも入つていただろう、声が出ない。

咽せる様に、俺は「ホホホ」と咳き込むと男は、慌てて俺の背中を摩つてくれた。

一体、この男は何者なんだろう？

ジョイが遅れて俺の所にやつて來た。

「ホープ！大丈夫かい？」

「ゴホゴホ……」

俺は手で一生懸命に大丈夫だけど、器官に水と一緒に砂が入つてしまつて上手く喋れない！と身ぶり手振りでジョイに説明していた。ジョイは、俺の喉に首飾りの紅の糸をチヨンと注すと、ポウツと触れた所から温かく感じて來た。喉と肺に少し入つていた水と砂が、全て取れたようだ。

少し怖々に声を出してみる。

「あああ……あ」

良かつた声が出る。

それで、俺は安堵したのがジョイに縋つてポロポロと泣き出してしまつた。

何かこれって、裸で泣いている銀髪の美少女ってヤツ！？
まるで、人魚みたいだな。

目の前の男の人は、俺の瞳を見て驚いた顔をしていた。

そう今の俺の瞳は、銀色に光っていたのだ。それはこの世界の伝説の少女を表す色だった。

「月の光を集めた様な眩い銀髪 月の様に光り輝く銀色の双眸 龍の血を持つ娘 」

その人が口にした単語を俺は耳にした時に、「 . . ジョイ . . . ! ふ、 . 服を！早く！」そう言うと、その場から立ち去ろうと勢い良く立ち上がると、俺は迂闊にもフЛАリと倒れてしまった。ジョイは、俺の体力が消耗してしまった事と、今 自分の目の前に居る男の事でその場に立ち尽くしていただけだった。

薄れ行く俺の意識の中で「姫 やつと見つけました

・ふいへ 」そう聞こえてきた。

俺の意識は、そこで切れてしまった。

優太の憂鬱　？（後書き）

ナマズって食べた事ありますか？
私はあります。結構泥臭いです。アメリカの中央西部になると気合
いでナマズを獲ります。エサ . . . ですか？自分の腕です。
ワイルド～

「う、ううへん

寝返りを打つと手と顔には、柔らかい感触が伝わる。

「此処……何処？」

目が覚めると、そこは天井が高くフワフワの広い見知らぬ部屋だった。俺は、丁寧にもベッドの上に寝かされていた。ゆっくり辺りを見渡すと、ベッドに天蓋が付いている。それに俺が居るこの一見お姫様と言わんばかりの部屋は、40畳あろうかと思う程広い。俺は、白い縫のドレスを着せられている。自分で着替えた記憶はない。なら一体誰に……？

疑問だけが残っている。

あの俺を巨大ナマズから助け出してくれたのは、一体誰なんだ？ キングサイズのベッドの上で考え事をしていた俺は、自分の側にジョイが居ない事に気がついた。

ジョイは、俺を守っていると言つていたのに……。

ベッドから起き上がりふらふらと窓辺に立つと外は、もう薄暗くなつていた。

部屋に備え付けてある魔法石の一つである火の石に寄つて光が作られている。

「ふうん。電気じゃないんだ」

その光の反射で、ホープが窓の外を見ようとした時に、自分の顔が窓ガラスに反射して見えた。

「ひ、瞳が……銀色に戻っている」

確かにジョイから、自分の力を使うと魔法に寄つて変えてもらつた僕の瞳が、元の銀色に戻ると言っていたのは覚えている。と言う事は、俺を助けたあの男にも、この瞳を見られたのだな。自分の瞳の色を他の人に見られてしまったと狼狽えていたホープは、自分の頭の中に血を抜き取られてしまつた事しか、浮かばなかつた。ほぼパニック状態に陥つたホープは、この部屋から抜け出す事しか考えていない。

部屋の窓からは、朝日が差し込んで来ている。

恨めしい程の太陽の光。

それも三つもある太陽。元の世界の太陽みたく一つで十分なのにさ。そんな事を言つているホープは、漸く気がついた。

今、この場所が何処にあるのかを。

自分の目の前を巨大なマズが優々と泳いで行つた。それを見たホープは、全身鳥肌物で、窓から離れると急いでドアの方へと向う。

「ブエブエブギヤア！」

日本語にもならない叫びをあげてしまった俺。

俺つてば、魚が大の苦手。その中でも特にナマズつて言つるのが一番の苦手なのである。あのヒゲが、まるで意志でも表しているのかと思う程、独りでに動いているのが、嫌なのだ。

広い部屋を駆け回り、俺はやつとの思いでドアの取っ手に手を付けた。

その時に、ギイ～ツと音と共に誰かがこの部屋に入つて來た。俺は、数歩後へと下がると銀色の双眸を大きく見開いたまま、今まさに誰かが入つて來るのかと見ていた。

もし、ナマズだったら、俺は泡を吹いて倒れてしまつだろうとそんな弱気な事を考えていた。

しかし、そんな俺の考えとは裏腹に、ドアを開けたのは人間の手だつた。

流れる清流を表すような色、ターコイズブルーの髪を持つ人間。筋肉の付き方で、男なのだろう。そこまで筋肉ムキムキとは言わないが、無駄の無い体つきをしている。

身長は俺の倍近く・・・。デカイ。僕が160くらいの身長・・・。と言つても、春から高校生の僕は、成長期なのだから、これからまだまだ伸びるのさ。死んだ婆さんも、爺さんも背がデカかつたしな。両親達も、2人とも170を優に超えてる。

でも、ふと思つたんだが、今の俺は百合番の体になつてたんだ・・・。

あいつも成長期と言う事は、ないだろ?な・・・きつと。身長と成長期の事を考えていた俺は、改めてこの部屋のドアを見つめていた。

「すつげー観音開きのフレンチドアかよ・・・。まるで『ード＝オブ＝ザ＝リン だな』と一人で納得する様に呟いていた。

この部屋の扉の高さが3メーター位あるから、何だか俺が小人みたいに感じるんだが・・・。全ては目の前にいるこの馬鹿でかいコイツの身長に合わせて作られているんだと納得した。

中に入つて来たデカイ男は、固まつている俺を見るなり、俺の目の前に跪いた。

「龍の血を持つ娘・・・。伝説の通り、輝く月の光を身に纏つうよ
なその銀の髪に、月を光を宿したその瞳・・・」

おー、こいつってば俺を落とそうとしているのか？

俺はまるで羞恥プレイでもされているような気分だった。俺だってそんな歯の浮くような台詞は言わない。と言つか言える訳無いだろ！ 本当に聞いているこっちが恥ずかしくなってしまいます。

相手は、俺がそんな事を思つているとほ知らないのだらつ・・

俺の手を取ると口付けをして來た。

そんな目の前の男の紳士的な態度に、俺は驚いて後ずさりをしている。

俺の頭の中には、危険信号が点滅中だ。

一体・・・何者？

俺は、見知らぬ男に手を取られ、口付けをされている。手を振りほどく様にして自分の手を胸元にやると男は、跪いたまま俺を見ている。この世界に召還されて、俺はたったの三日間だつているのに、何でこんな目に遭わなきやなんないのさ！運命つてヤツを恨んでしまう……。

そう言えば……ジョイー俺の護り手なんだろ！？
ホープは、当たりをキョロキョロと見回していたが、ジョイいらしき者は居なかつた。なら、「コイツに聞くしかない……。
銀の双眸を光らせると今にも目からビームが出そうな位、男を睨みつけた。

「ジョイ……ジョイは？オ……俺の護り手のジョイ……
・ジョイは何処なのぞ？」

俺がジョイを探している事を知つた男は、パチンと指を鳴らすと、今閉めた筈のフレンチドアが開くと、衛兵に伴われたジョイが連れて来られた。

「ジョイ……」

俺は、ジョイに会えた嬉しさにジョイに抱きついた。心細さと苦手な大ナマズが窓の外から、俺を見ていると言う事で涙がポロポロと出て来る。そんなオレをジョイは優しく抱き締めてくれた。
膝を折り、俺の目線まで下りてくれるジョイは、何処となくいつもよりも優しい。いつもなら、俺にお調子者のダメホープと言つていいのだが、今日は違う。一体どうしたんだ？
僕は首を傾げている。

「ジョイ。此処はどこだ？」

「ホープ……あなたは今、女性なのですから、もう少し言葉使いに気をつけてください。私と黙ってみましょう。良いですね！」
俺……じゃなくって、私はため息をつきながらジョイに向き直つた。

銀色の双眸を光らせる、俺の……じゃない私の前に跪いている男を指差した。

「ジョイ。此処は、何処なの？！ そして、私の手をさきから食べ物の様に唇をつけて来る、このスケコマシは一体誰？！」

「す、スケコマシ……」

突然、ホープにそう言われた男は、面食らつた様に咳くと、次に豪快に笑い始めた。

「こいつは面白い。俺の事をスケコマシと黙つて来る女が伝説の姫君だとは思いもしなかつたぜ。流石は龍の血を持つ娘だ！ はははつははは！」

優太の憂鬱？ 伝説の都市 アクアトピア

「ジョイ。此処は、何処なの？！ そして、私の手をわざから食べ物の様に唇をつけて来る、このスケコマシは一体誰？！」

「す、スケコマシ……」突然ホープにそう言われた男は、面食らつた様に咳くと、次に豪快に笑い始めた。

「こいつは面白い。俺の事をスケコマシと言つて来る女が伝説の姫君だとは思いもしなかつたぜ。ははははははは」

男は、面白そうにオレ……じゃなかつた私の長い銀髪を一房掴むと、私の髪に口付けをした。

例え心の声でも、ジョイには全て聞こえているらしく、俺と心の声で言おうものなら射る様な目つきで俺を……いや私を見ている。さつきから、鳥肌が立ちまくりなんだけど……

別に髪の毛一本一本に神経が生えている訳じゃないが、な……

何だよこの羞恥プレイは……？

ホープは、自分の顔が完熟トマトの様に真っ赤に一気に染まつているのが、自分でも分かつた。

そんな初心なホープの反応を見て、面白そうに男はホープの細く白い手首を掴むと素直に自分の思った事を言つて来た。

「折れそつなくらい、細い手首だな」

それを聞いただけで、ホープは真っ赤になる。

今、まさに自分は男の腕の中に居る。自分の華奢な腰を男の逞しい腕で抱き締められているから、動こうにも動けない。ただ身動きが取れないから、男の腕の中でジタバタしているだけなのだ。

「お・・・お戯れは、お止め下さい・・・。それよりも、此処は何処なんです。」

必死になつてホープは、見知らぬ男の腕の中からぞりやつて逃げようかと考えていた。

「アクアトピアだ。」

「アクアトピア？ そんな国のは聞いた事がありません。早く私を下ろして。」

ホープの頭の中にはこの世界の地図が瞬時に浮かび上がつたが、幾ら探してもアクアトピアなどと言ひ国は見つからないのである。男は、ホープを抱き締めたままベッドまで運ぶと、そつとホープをベッドの上に寝かせた。

身の危険を感じたホープは、何とかこの男の魔の手から逃げようと上体を起こして、少しづつ後ずさりをしていた。

もう少しで、この広い大きなベッドから下りられる…と思った瞬間、巨大な大ナマズが急接近して來た。嫌な気配を感じたホープは、ふと恐いもの見たさで窓の方を振り返ると、其処には窓一面に映る巨大な大ナマズの顔があつた。

ジョイの方へ逃げようと必死になつて誰かにしがみついた。

「ほう。伝説の姫君は 我が家の番犬が苦手と見たな。姫、アレはポチです」

「ポチ？ 番犬？ アレはどう見たつて、魚だ。しかもナマズ！ それがどうやつて番犬になるんだ？！」

思わず突つ込みそうになつたホープは、ふと気がついた。

窓の外から見える風景は、地上の物ではない . . . 。

「水の中の都市？そんなの神様だつて教えてくれなかつた . . . 」

ホープの言葉に、男は腕を組むと低いテノール音で心地よく私に言った。

「それは、地上の話だからだ。アクアトピアは、2000年前に滅んでいた。最後の予言者ダスコ＝ガマダの言葉では、地上の人間達が精靈界でも支配しようとしている。この精靈界の高い文化を薄汚い人間達は、真綿で我らの首を絞める如く少しづつ奪つて行つたのさ。その後、此処は不毛の地—即ち死の谷と呼ばれる様になつた」

ホープの腕を掴んでいた男は自分の胸にホープの手を乗せるとこの国アクアトピアの悲惨な歴史の事を話してくれた。

「水の中でしか生きられなかつた弱い力を持つ物達は、泉の水が無くなると直ぐに力つきてしまつた。

何とか生き延びた俺達は、自分達に魔法をかけ水の無い陸の上でも生きられる様に、術を施した。いつか俺達の国、アクアトピアを蘇らせてくれる伝説の姫君に会える事を夢見て」

「 . . . 言う事は、オレが . . . ジャなかつた私が、精靈達を召還して作らせた、この泉と言つか、湖がアクアトピアと言つ事なんか . . . 。

じゃあ、この死の谷で盗賊と恐れられている人達は、元々はこのアクアトピアの住人で人間を憎んでいたと。だから、ここ死の谷に入つて来る人間を次々に襲つたと言つ訳なのか . . . 。

考え事を頭の中で巡らせていたホープの顎を引き上げた男は、そつと顔を近づけると、掠めるように唇を合わせた。

「お orz 落ち込む . . . 私のファーストキスが男に寄つて奪われるなんて . . . 」

落ち込んでいたホープに追い打ちをかけるように、ジェイが私にトドメを差して来た。

「いえ、ファーストキスではありませんよ。だって、この方、先ほどあなたを助ける為に人工呼吸を何度もやっていたもの」

じ、人工呼吸 . . . ってマウス＝ツウ＝マウス？
ホープのガラスの心は、ピキッと音を立てて崩れ始めた。

銀の双眸を潤ませて、ホープは男の横つ面を思いつきり平手打ちした。

心地良いパンと音が寝室内に響いた。

「名を名乗れ！」

ホープは、今にも精霊達を呼び出さんとしている。
そんなホープの反応を見て男は両肩を竦めた。

「水の中で溺れた姫を助けてやつたのに、その恩人に対してこの態度とは、伝説の姫もただの小娘だつたつて訳か。俺の名を知りたかつたら、俺の寝室へくればいい。だが、無事には返さないけどな。此処から出たければ、出るのは構わないが、外には、ポチが待っているからな。地上に出たければ、オレの名を知る事だな。そうすれば、出してやる」

な . . . なんて事だ。オレは . . . いや、私は囚われの姫となつてしまつたのか . . . 。

頃垂れるホープの肩をジョイは、優しく抱き締めてくれていた。

「ジョイ . . . 何故、教えてくれなかつたんだ。このアクアトピアの事を . . . 」

「それは、あなたが見境なく”新幹線”なる物と同じ様に猛スピードで、この谷を飛び越えようとなさつたからです。それをしなければ、良かつたのに . . . あなたは自分の為ではなく、ここにいえ . . . 他の人間がもし迷つた時の事を考えて、巨大な湖を作つてしまつたのですよ。初めは泉だったのですが、周りの森林が水を呼び、あなたが一晩眠つている間に、泉が湖へと変化して行つたのです。こんな風に」

ジョイは、神様から貰つた地図を広げるとこの世界で一番面積が大きい死の谷を赤く丸で囲んだ。

どうやつて、あの男の名を知れば良いんだ . . . 。

優太の憂鬱？ オレって生け贋？（改）

「水の中で溺れた姫を助けてやったのに、その恩人に対してこの態度とは、伝説の姫もただの小娘だつたって訳か。俺の名を知りたかつたら、俺の寝室へくればいい。だが、無事には返さないけどな。此処から出たければ、出るのは構わないが、外には、ポチが待っているからな。地上に出たければ、オレの名を知る事だな。そうすれば、出してやる」

「な……なんて事だ。オレは……いや、私は囚われの姫となつてしまつたのか……。

頬垂れるホープの肩をジョイは、優しく抱き締めてくれていた。

「ジョイ……。何故、教えてくれなかつたんだ。このアクトピアの事を……」

「それは、あなたが見境なく”新幹線”なる物と同じ様に猛スピードで、この谷を飛び越えようとなさつたからです。それをしなければ、良かつたのに……。あなたは自分の為ではなく、ここにいえ……他の人間がもし迷つた時の事を考えて、巨大な湖を作つてしまつたのですよ。初めは泉だったのですが、周りの森林が水を呼び、あなたが一晩眠つている間に、泉が湖へと変化して行つたのです。こんな風に」

ジョイは、神様から貰つた地図を広げるとこの世界で一番面積が大きい死の谷を赤く丸で囲んだ。

どうやって、あの男の名を知れば良いんだ……。

ホープは真剣に悩んでいるとジョイが手をポンと叩き、オレ……
じゃなかつた私の顔を見た。

何だか、嫌な予感がするのは、気のせいでしょうか

ホープに近づいたジョイは、グワシツと私の手を掴み風呂場へ連れて行つた。

あー何だかドンドン嫌な予感がしてくる。
一れつて、昔な版の上の鲤なうず、土鍋

「ホープ。聞こえますよ。それを言つなら、五右衛門でしょ。」
釜茹での刑にされたんだから。馬鹿な事を言つてないで、わざわざ
入つて下さい。湯浴みしますからね。しつかりとピカピカに洗つん
ですかりー。」

あ・あの・・・そんなに田を光らせないで下さい。

はつきり言つて怖いです。教わるんじやなくて、生け贋にされそ
うで。。。。

生け贋？！

俺の心の声を聞いたジョイは、天使の笑顔で俺の髪を丁寧に洗つて
いる。

「ホープ。オレではなく私と言いなさいと何度も教えたでしょうー。」

顔中泡だらけになりながらも、プルプルと震えるお · · · ジやない、
私の黄金の右手 · · ·

さつき、一瞬物凄い殺氣を感じたが、深くは考えない様にしよう。

ジェイに一皮も一皮も剥かされるかと思ひ程、石鹼で擦られ、髪の毛は念入りに洗われるわで、お……じゃなかつた、私は心身共にクタクタになつてゐた。

ぐつたりしている私を抱き抱え、器用にも夜会用のドレスに着替えさせると私の背中を叩いて起こして來た。

「何すんじゃいー」「うあー」

そう言いそうになつた。

だが、ジェイの窓ガラスから、光る一つの目……。
い、嫌だ……み、見るな……。目を離さうにも、恐いもの見たさなのか、ホープは凝視してしまつてゐる。
うねる様に動く一本の長いヒゲを見た途端、一気に眩目眩を起こしたホープは、その場で失神した。

「う……うん……」

ゆつくり目を開けると、此処つて初めに連れて來られた部屋とは違う所みたいだ……。

何だか妙に、妙に、そして最大級に嫌な予感がするんだけど……。
つて、オレつてば何処で寝てんの！？

此処つて、どう見ても神殿難だけど……。

やっぱ、オレつてば生け贋なんだ……」の際もう目を瞑つたまま寝た振りで決めとくか。

幸い、暗い神殿には誰も居ないし。

広い神殿の生け贋を捧げるような寝台に寝かされていたホープは、自分の手足を縛っていたロープを解く為にキヨロキヨロと辺りを見渡した。

すると自分の近くに剣を地に差して跪いている偶像があつた。見た所、像が手にしている剣は本物。

しめた！これなら、ロープを切る事が出来る！

寝台から転げ落ちる様に下りるとホープは、辺りを見渡した。

落ちる時に、派手に捧げ物の皿とか器とかをひっくり返しちゃったのだ。

あんなに大きい音がしたのに、誰も確かめに来ないなんて・・・。
不用心と言うより、大丈夫か？此処・・・。

肩と腰を思いつきり打つたが、生け贅で殺されるより数百倍マシだ。
ホープは、芋虫が地上を這う様にウネウネと前進している。

こんな事になつたのも全て、アイツの仕業だ！

ホープの頭の中では、自分に手を振りながら、にんまりと笑つているジョイがいる。

「これは、ホープが全て招いたことですからね。責任は自分で取りましよう。ホープ、蒔いたタネは自分で刈り取らなきやいけないんですよ。分かりましたね」

苦虫を潰した顔で、モゴモゴと動きながら、漸く偶像の近くまで来たホープは、後ろ手に縛られている手首のロープを剣の歯に「ゴシゴシ」と擦り付けた。

「ツ！」

少し自分の肌まで切つてしまつたようだ。

ポタリとホープの赤い血が、一滴 神殿の床に落ちる。

その途端、床がポウと鬼火の様に光り輝いている。

「誰だ！其処で何をしている！」

駆けつけた男は、オレを助けたあの男だつた。

ホープの血がゆっくりと神殿の床に、また一つ赤い雲となつて落ち

た。

（神様・・・ゴメン・・・。血を流しちゃったよ・・・。貴重な龍の娘の血を・・・）

男はホープに近づくと、縄を解いてくれた。手の切り傷から血がまた一筋流れている。

ホープは、震える声で男に言つた。

「もしも、あんたに一欠片の憎しみも無いって言うなら、俺の血を舐めなよ。そうすれば、アンタの願いは叶う。だが、ほんの少しの憎しみがあれば、アンタは自分の闇に取り込まれることになるが、どうする?」

男は、俺の腕に舌を這わせた。ホープの体にビリビリと稻妻に打たれたような感覚が体中に走つた。

百合香・・・ジョイ・・・助けてよ・・・

意識が朦朧としてくると、両膝が自然におれて、男の腕の中にホープは落ちた。

百合香の溜息　？（前書き）

優太から百合香に場面が移ります。

春休みが始まつてすぐのピアノ教室の日。

何故か隣には、私の弟の優太がいる。何故か……私がこの言葉を使うのは、あの忌々しい事件を私は今でも忘れないでいるからだ。優太は……あの子は多分、あの深紅の双眸を持つた男に何をされたのかと言う事は、知らないだろうが、私はあの時あの子を……優太を守れなかつた。今はもう亡くなつた祖母から、「哀れな龍の血を持つ娘ーあの子を……優太を守るように。それが、ガーディアンとして産まれたお前の宿命なのだよ。宿命からはどんなに足搔いても、逃れる事は出来ないのだ。流される様に自分の宿命と共に生きよ。」と言われて来た私。そりやく幼い頃の私は、ガーディアンと言つのが一体どんな事なのか何て言う意味さえも知らなかつた。今なら分かる。体の良い盾だわ。身をもつてでも龍の血を持つ娘を守れって言う事なのよね……。

私は、あの日まで優太の血がこの世界にとつてどれだけの驚異になることなのか、知る由もなかつた。本当にあの日までは……。祖母は、生前毎晩のように私達孫に、不思議な昔話を聞かせてくれた。

遙か昔、人は神になろうとして禁断の罪を犯した。その時代には、人間は沢山居たが、皆それぞれの役割を持つて生きておつた。そんな平和な時代に、人は初めて禁句を犯してしまつ。禁句ーそれは、禁断の果実と呼ばれる「龍の実」を食べてしまつた女から始まる。女は、美しく賢く誰からも好かれる人間であつた。その時代の神と言われるトステーべ神にとても愛された女であつた。女は月の光をその頭上に纏わせたような、長く艶やかに光る白銀の髪をしていた。その頃の人間達は黒髪、黒目の者や、茶髪に茶目、または緑の目、

金色翠目や青目の者が殆どであった。その時代に女は異端であった。だが、女は人を愛し、平和を愛していた。

ある日 女は喉の乾きに我慢が出来ずに禁断の龍の実を食べてしまつた事から、その体の中に龍の血を取り入れた。

それは、女を手に入れる為に、男達が戦いを始める切つ掛けとなつた。瞬く間に世界は荒れ、女は神から罰として、その龍の血を持つ者は、全て男として産まれる事になった。その龍の血が、また争いごとして使われないようにする為だつた。女はその胎の中に子を宿していた。

「どうか、神様、どうか。この子だけは私から取らないで下さい。この子の命だけは . . . 」

縋る様にトステーべ神に願う女に神の大きな御手は、女の胎へと行くと白く光つた。

神は、女に告げた。龍の血が何代かに渡つて、お前と同じ純粹な龍の血になる時は、星の数ほどに広がるお前の民の中から、産まれて来る子孫達の中の一人だけ、完全なる純粹な龍の血を持つ者が現れるだらう。その者は、生まれながらに銀の髪を纏い、灰色の瞳を持つ、利発な子供となつて世に出てくるであらう。女よ、お前は代々、その龍の血を横しまな者達から守れ。

女は震えながら神に訴えた。

「どうやつて、その龍の血を持つ子供が産まれた時に、私の子孫達が守れましようか？」

神は、その者が産まれし時、二つの命と一緒に出て来る。一つは純粹なる龍の血を持つお前の魂が入つた子供とそしてその者を守るべきにして産まれた子供だ。

祖母は、この話は昔ロシアに居た頃に曾祖母から聞いた話だつたよと教えてくれた。祖母も私と同じ銀色の髪をしているが、祖母には

双児の弟は居なかつた。だから、祖母には純粹な龍の血は流れていなかつたのだろう。私の瞳は祖母と同じ茶色だつたし、髪の毛は母親と同じ明るいブロンドだつた。だが祖母は古から伝わる魔術で、私の髪と瞳の色を優太と同じにしてしまつた。祖母はいつも私に口を酸つぱくする位に言つていた。

「優太を守れ。それがお前の使命だ」

幼い頃から言われて来た言葉を私は、あの時守る事が出来なかつた。あの忌まわしいほどの澄み切つた春の日。

バス停で、私達親子は隣町にあるピアノ教室に行く為のバスを待つていた。私と優太は、バスが来るまでの10分間が暇で暇でたまらなかつた。そんな時だつた。私が「優太！ そうだ！ かくれんぼしよう！」そう言つてしまつた。あの時あんな事さえ言わなければ、こんな事にはならなかつたのかも知れない。僅か5才の自分達には、優太の中に秘められた血がどれだけの事を起こすのかなんて、これっぽっちも真剣に考えてみた事なんてなかつた。

2人で隠れんぼして遊んでいた時に、後から来た男に私は口を封じられ、優太と共に連れて行かれた。男は私の顎を掴んで、私の瞳を見ていた。

その時にチラリと見えた男の深紅の双眸に、恐怖で歯がガチガチとなつた。

男は、チッと舌打をすると「コイツはガーディアンだつたのか。」そう言つと優太の方に向つて近づいて行つた。

だらりと垂れた優太の白い腕。そして流れるような銀の髪を見た男は、嬉しそうにクッククと喉を鳴らして笑つていた。

その薄ら笑いに、気がついた優太は、ゆっくりと目を覚ました。

綺麗な灰色の瞳に男は、ニヤリと笑うと優太の細く白い腕を掴んだ。

「優太、逃げて！」

私の声に驚きながらも、優太は目の前にいる男の瞳の力に動けないでいるようだつた。

次の瞬間、男はナイフを取り出すと、優太の白い手首に突き付けると踊るようにナイフで優太の手首に傷を付けた。男は、呪文を唱えながら滴る優太の血を蒼い小瓶に入れた。

その小瓶は一見、ママが持っていた香水の小瓶に似ていたけど、周りに刻まれている文字か模様は、見た事がなかつた。

ぐつたりとした優太に男は、薄ら笑いを浮かべると次の瞬間、霞のごとく消えて行つた。

私は、怖かつた。一体これから、何が起こるとしているのか、それを考えただけでも子供心に恐ろしくて、震えた。そんな私達を見つけたのは通りすがりの学生達だつた。そいつらは、私を見ると近づいて来て、携帯で何処かに電話をしていた。そのすぐ後で、乗り込んで来た警察官達に私は保護された。男の警官を見る度に、あの深紅の双眸を思い出してしまつ。それで、私には女の警察官が来るまでの間ずっと優太の側にいた。

「優太 . . . ごめんなさい。守れなくて、ごめんなさい。」

ぐつたりとした優太に、何度も何度も謝つている幼い私の姿に、警察官達の目には美しい姉弟愛だと言う風に取られたのだろう。警察官から、祖父母は私を怒らないようにと何度も念を押していたから。私は、自分に課せられた義務を果たせなかつた。それだけだ。家に帰つてから、私は祖母に必死で謝つてはいた。私さえあんな事を言わなければ、こんな事にはならなかつたのだと、何度も祖母に謝つた。

祖母は、そんな私に何も言わなかつた。ただ床に丸く指でなぞるとそこには、私達が攫われて一週間の間に起こつた、この世界の出来事を見せるための呪文を唱え始めた。両親はそんな祖母を止めたが、

祖母は、「龍の血を持つ娘の魂を守る者は、その後の事も知らなければならぬ。例え、どんなに惨い事でも。」そう言って、両親を諫めた。

「百合香。見てご覧なさい。あなた達が攫われて、優太の血が何者かに寄つて取られた後の出来事だよ。お前はこの状況を知らなければならない。」

祖母の言葉に、ただ私はコクリと頷くと、床に一面に広がる不思議な現象を見ていた私の目には、優太の血を使って新しい爆弾を開発した国が他の国と戦争をしていた場面だつた。その土地は、地上に一滴落とされた優太の血に寄つて多くの山火事がまるで爆発するかのように瞬時に発生し、多くの人々の命が一瞬で消されて行つた。それは、幼い百合香の心に深く残る事になった。

百合香の溜息？ ガーディアンの宿命と責務

私が優太を守れなかつたから……。

あの日、隠れんぼをしようなんて言つてしまつたから、優太は私と一緒に攫われた。

龍の血を持つ娘……それは、男として生を受け、その血を消して悪に使われない様にガーディアンに守られなければならない。龍の血は、平和を望む者には、平和を。悪を望む者には、全ての生きとし生けるもの達を生け贋と捧げてしまつ大魔王をその身に宿らせてしまう。

そんなこと、私が知る分けないじゃない。

だつて、私は、まだ幼稚園児だったんだもの。

思い出すだけでもムカムカして来る……。

ギリギリとペンのキャップを噛んでしまう百合香は、こんな春の長閑な風景が一番嫌いだった。どれだけ時が経とうとも、自分の心に付いてしまつた傷は、取れない。

あの深紅の双眸をした男が、自分に近づいて来た時は、本当に死を感じた。百合香がガーディアンだと分かつた時点で、男は道具を捨てる様に、自分の体を空中に投げ飛ばした。木製の空き箱で肩と脇腹を打つた百合香は、男がゆっくりと自分の弟に近づいて行くのを助ける事も出来ずただ見ていた。

あの後、世界で何が起つたかなんて私は知らなかつた。

「百合香。見てご覧なさい。あなた達が攫われて、優太の血が何者かに寄つて取られた後の出来事だよ。お前はこの状況を知らなければならない。」

祖母の言葉に、ただ私は「クリと頷くと、床に一面に広がる不思議な現象を見ていた私の田には、優太の血を使って新しい爆弾を開発した国が他の国と戦争をしていた場面だつた。

その土地は、地上に一滴落とされた優太の血に寄つて、多くの山火事がまるで爆発するかのように瞬時に発生した。

まるで戦争を思い起させるシーンだ。多くの人々の命が一瞬で消されて行つた。

それは、幼い百合香の心に深く残る事になつた。

祖母は、「龍の血は、破壊を求める者には、破壊を、平和を求める者には平和を求める。例えそれを求めている者が、ほんの少しでも悪に染まつていれば、龍の血は悪の力を發揮してしまうのだよ。以前、百年前にも同じような事があつたのだ。しかも、その子供は優太そつくりの子供だつたよ。」

それを聞いた百合香は、あの日の事を思い出していた。一つだけ思い出せない事があるのだ。何故だか知らない。祖母は、そつと百合香の頭に手を置くと記憶の糸を取り出した。

綿菓子の綿の様に真っ白で、フワフワの物だつた。

それを床に置くと、記憶の糸は床に呑み込まれて行つた。

あの日の出来事だ。百合香に近づいた男は、百合香の髪の毛を数本引き抜くと銀から金茶色に変わつた髪を見て、「ケツ！ ガーディアンか。」口にすると、優太の方に歩み寄つた。

優太の髪を数本引き抜くと何も色が変わらないのを確認して、ニヤリと気味悪く笑つていた。

次の瞬間、男と優太は一瞬だけ消えたのだ。

百合香の記憶の糸の映像を見ていた祖母達は、「やはり……」

100年前のあの悲劇は、優太の血の所為だったのか。。。」と頃垂れていた。

祖母の話に寄ると、世界はその龍の血を持っていた子を連れた男が、いきなり現れて様々な戦争の道具を作り出して行つたと言う。それを目の当たりにした当時の国々のトップは、その子供を手に入れる為に醜い争いをし始めたのだ。

一人の氣弱そうな青年に目を付けた、深紅の双眸の男は、その青年に優太の血を飲ませた。

氣弱だった青年は、内に秘めた野望で言靈を操り、民衆の心を惹き付け、やがて一つの国の民を滅ぼし始めた。その青年が起こした政党は、やがて自国民を引き連れ、欧洲全土を制圧しようと戦火の手を広げて行つたのだった。

ほんの少しの龍の血が、氣弱だった男を全世界を震え上がらせる凶悪な独裁国家を作る事になつた。そして、それは世界を戦争の渦へと巻き込んだ欧洲の歴史は龍の血を巡つた歴史となつたのだと言う。今なら分かる、その氣弱だった男が誰だったのか・・・。

あれ以来、百合香はガーディアンとして優太を守るのではなく、優太が自分で自分の身を守るようにすれば良いと思うようになつた。だから、初等部から受験をして某お嬢様学校に入学したのも、優太から離れる為だった。

祖母が、他界し、その後を追う様にして、祖父が他界した。

祖父の最後の言葉は、「自分を責めるな。優太は、いつか気がつくだろう。自分の運命をだから、許してやれ。」そう言つて私の手を握りしめて天国へと旅立つて行つた。

幼少のあの忌まわしい事件以来、私は男の人に対して極端に嫌うようになつた。男の人を見る度に、あの深紅の双眸を持った男を思い出させるのだ。その事を思い出す度に、祖母に見せられた世界の悲劇が、まるでフラッシュバックのように私の頭の中に蘇つて来る。

そんな中、トオルだけは別だった。幼馴染みとして、事件後も樹の影で泣いている私を見つけて、いつも慰めてくれていた。

トオルには、女子校に行く事にしたと言うと無言で頷いていた。彼も、私の苦しみを分かってくれているんだと思うだけで、それだけで十分だった。

受験前日、私は優太を羽交い締めにして、試験を受けさせた。もちろん、成績優秀な優太の事だ、落ちる事はない。運動テストも筆記テストも、行動テストも全て満点だったのは、この学校始まって以来の快挙だよと後で、中等科の担任に言わされた私は、そのイメージを固守する為に、努力は惜しまなかつた。

その後は、両親が海外に長期出張になるから、お前達も来いと言つて来た。私は頑として首を縦に振る事はしなかつた。ようやく、手に入れた私の「自由な世界」をそう簡単に手放せるものか。

両親は、渋々2人で海外に行く事になり、その両親が優太に「お前は男なんだから、百合香を守つてやれ。」そう一言告げると2人してルンルン気分で、海外へと行つてしまつた。

かくして、私と優太の2人だけの生活が始まった。

昔から成績優秀な優太は、別に勉強しなくとも、全国模試の成績はいつも全国で2位か1位だ。私は違う。そこで、家事の殆どが優太任せとなつた。

百合香の溜息？

百合香の苦悩は、いつまでも続くのだ。

初等部の時は、ママと一緒に学校へと登校していたのだが、上級生になるに連れて、それは止める事にした。

母親は、娘の私の事も気遣つてはくれていたが、この家の跡取りとなるのは、私ではなく優太だ。

昔から優太は、体が弱かった。

少し寒い日になると直ぐに風邪を引くし、それが拗ると一週間程寝込むのはいつもの事だった。

だから、私も母親には甘えない様にしていた。

ガーディアンである私に出来る事は、優太の熱を取り除いてやつて、自分の体の中に入れる事だけだ。

昔から、ガーディアンと呼ばれる者達は、体が丈夫に出来ている。それは、世界を救う役目を持った者を守る為にそうなつたのだと祖母から聞かされていた。

だからだろう。私は一度も風邪を引いた事などない。本当の健康優良児だ。

たまには、病氣にでもなつて母親を独り占めしてみたいと思つた事もあつた。だが、それは我が慢なのだろう……。

熱にうかされる優太を見ていると、何だか哀しくなる。

優太は気付いていないだろう。だけど、病氣で寝込む度に謙言の様に言つてゐる。

「龍の血……なんて……いらない……僕を……
・・・自由にして……か、解放して……もう、人が……
・・・傷つくのは沢山だ」

龍の血を引いている事で苦しんでゐるのは、私だけじゃなかつた。

優太が熱で学校を休んだ日、ママはいつも優太に付きっきりだ。

もし分けなさそうに、私に行つてうつしゃいと言つママ。苦笑しながらも、行つてきますと答えるといつものバス停へと向つ。

百合香の通学手段は、バスを使った物となる。

何処をどうやって調べたのか、百合香が乗るバスはいつも他校の男子学生で満員となってしまった。

百合香が男嫌いな事を知つてゐるからなのか、殆どそれは嫌がらせにしか思えなかつた。

そんな時に知り合つたのが、小田マリアだつた。

マリアは、ハキハキしてゐる百合香とは違つて、大人し田の女の子だつた。

優太を女の子にしたら、きっとこんな感じになるのだろうな・・・。そう思つた百合香は、マリアとすぐに打ち解けた。

優太の卒業式が迫つてゐる頃、マリアからの突然の告白。「優太君に伝えて欲しいの。金ボタンが欲しいって。」だけど、どうして私は言つうかな?

だけど、マリアの顔は、トマトのよじに真つ赤になつてゐた。

親友の願いを無下にする訳にも行かず、私は優太を呼びつけて、マリアと引き合わせた。

優太は、トオルと一緒にやつて来て、頭をボリボリと掻いていた。

「それくらいで良いなら、別に構わないけど。だけど、君 誰?」

そう優太は、マリアの事は何にも知らないのだ。何度か家にも連れて來ていたのに、何でマリアの事を知らないと言い出すんだ? 男の世界とはそんな物なのか? そう思はせるほど、驚いたマリアは、目に涙を浮かべて震えていた。

驚いていた優太に、私は「私の親友であるマリアを泣かせたら、ど

うなるか分かっているんでしょう？「そう言つと羽交い締めのポーズをとり始めた私を見て、優太の顔色は真っ青になつていた。

「それとも、優太は他に好きな子とか居るわけ？ どうなの！ハツキリ言いなさい！」

「居る分けねーだろー！ それに今は生徒会で忙しいんだしさ！ そんな暇はない！だから、百合香！放せ！！ ぐ、首が絞まるー！」

左手で床をバンバンと叩く優太の様子に、私は満足した。もつ、ギブアップか・・・。情けない

でも、この事で優太自身、好きな子は居ないと言つていた。
卒業式の後に会おうと無理矢理、優太に約束をさせると、マリアは私に抱きついて来た。

一応、父兄と言う事で、私はマリアを連れて優太の学校へ行つた。他の保護者達への挨拶をして回つていたら、卒業式が始まつた。周りから「やつぱり、優太君は、凄いわね～。去年は送辞を読んだでしょ？で、今年は答辞。それに、生徒会も引っ張つてやつていなんですね。お姉さんの百合香ちゃんは某有名女子校にトップで入つていて、良いわね～」そんな私語が私とマリアの背中を行き来している。

卒業式も無事に終わり、優太を連れて帰るついでするとモッチーから声をかけられた。

「おー！百合香ー！」

「叔父様。（外では猫をかぶる為にそう呼んでいる。）優太は？そろそろHRも終わつた頃だし、帰ろうと思うんだけど・・・。」

そんな私の言葉に、モツチーは、下駄箱で凄い人ばかりになつてゐるのを指差した。

「あれば何？女の子達が群がつてゐるんだけど……。モツチーの話に寄ると、あれば優太のファンの子達だと言つてゐた。見れば、中には泣き出す子達も居る程だつた。優太ってそんなに人気があつたんだ。

「え？でも、優太は好きな子は居ないつて言つていたけど……」

そう口に出すとモツチーは、私の額を人差し指で小突いて悪戯好きの笑みを見せた。

「優太が女の子に一線を引くようになつたのは、自分を守れなかつたと言つて泣いていた、お前を守れなかつた事が原因だそうだ。」

俺様魔王のモツチーに小突かれた額を手で撫でているとボロボロになつた優太が、下駄箱から解放されて出て來た。

マリアに約束していたボタンは、袖のボタンさえも全て全部女の子達に巻り取られて、まるで山賊にでもあつたかのように、コレコレの優太がそこにいた。

優太は、私達を見ると笑顔で「ゴメン。ボタンを死守出来なくて。だけど、これで良かつたやるよ」そう言つて、マリアに自分の学ランを渡していた。

そんな優太を見たモツチーは、クスッと笑うと私に耳打ちして來た。

「アソ、まさか自分を好きになる子が居るとは思つても居なかつたと言つていたぜ。それに、自分がモテることすら知らなかつたらしい。女の子達がアソのボタンを欲しがるのは、みんな百合香にあやかりたいからなんだろうな～なんて、真剣に思つてんだよ。ア

イツの鈍感さには呆れるよりも、面白れーよな

優太のあまりの鈍感さに、目眩がして來た。

この日は、叔父であるモツチーの家で晩ご飯にありつく事になった。

「トオルと優太がお前のクラスに行くように手配しておいた。だから、宜しく頼むぜ。ガーディアン。それに、これからは俺の事をモツチーじゃなくて、先生と呼ぶ様にしろよ」

モツチーから言われた時は、思いつきり「飯を喉に詰まらせるかと思つた。

蒸せながらも、ご飯を胃へと送り込むと涙眼でモツチーを見つめた。モツチーは、涙眼になつた私に「ワリーワリー。俺もお前達と同じ学校へ移動になつたから、俺も一緒だ。だから、安心しろ。お前達の担任は俺に決まつていてるからな。だからといつて授業をサボるなよ」そう言つと笑いながら、水割りを飲み干した。

まさか、春休みになつた日に異次元への扉が開かれるなんて思いも寄らなかつた。もし、そうなる事が分かつていたら、あの日のピアノ教室はキャンセルしていたのに . . . 。

コンクールも近い事から、休む訳にも行かず、私と優太は急いでバス停へと向つた。バス停には、男子学生達の列が並んでいた。

モツチーや、トオル以外の男の姿を見るだけで、あの忌まわしい記憶が蘇つて来る。私の足はまるでアスファルトに釘付けとなつたように動かなくなつた。そんな私に気を使うように優太は、別のバスにしようか？と言つて來たが、私達のピアノ教師は、時間にすぐ五月蠅い。

仕方無く、優太が携帯でピアノ教室に電話をかけると「もしもし、優太です。少し遅れますから、待つている人を先に見て下さい」そう言つてくれた。

ピアノ教室でも優太は、特別待遇だ。先生の覚えも高く、今まで幾つものコンクールの賞を取つて來た。そんな優太に言われば、先生も怒る事などない。

どうして、私は優太のようになれなかつたのだろう？

羨ましい。皆に大事にされて、愛される優太が羨ましく思えた。もし、入れ替わるのなら、私は優太になりたい。そんな事を思いながら、元来た道を戻つていると、トオルと会つた。

空き地を通り行けば、下の道に降りられるし、そこまで出ればピアノ教室だつて、歩いて5分だ。

いつの間にか、空き地を通りて行く事になつた三人。春なのに、晴天続きで草が枯れて來てる。

背の高い草が、私の長い髪に巻き付きそうで怖かった。そんな事を知つてか、私の肩をグイッと引き寄せた優太は、自分が被つていた帽子を私に被せると長い髪の毛を器用に帽子の中に入れた。

「あ、ありがとう」

優太は、屈託のない笑顔で私に微笑みかけると前をズンズン歩いて行つた。

トオルは、私の手を繋いで優太に遅れないようにと獸道を確かめながら歩いていた。

途中、足下に当たつて来た変な形の石ころに興味が湧いて、つい2人を呼び止めた。私達の存在に気がついたかのように、石ころは、私達三人の前にまるで自分の意志でもあるかのように、転がつて来た。

三人とも、転がつて来た変な石ころを拾うと、手に取つた。

三人の手に触れた石は、それぞれ色を変えたボックスへと変化して行つた。

トオルの近くには青いボックスで金の模様が刻んであつた。

優太の足下には、銀のボックスで朱と金の模様が刻んであつた。

百合香の足下には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであつた。

三人が、それぞれのボックスを手にした時に、空から声が振つて来た。

「ボックス・・反応アリ」

それに気がついた時、私達は白い光の中に吸い込まれて行つた。

百合香の溜息？ 微睡みの中で

心地よい風が、百合香の髪を撫でる様に吹いている。たまに聞こえる音楽はモーツアルトの曲だ。気ままに歌う様に奏でて来る。

これつて、優太が自分に言つていた「カンタービレ」の事だ。モーツアルトのソナタ……。

優太が、10才の頃だつたかな……コンクールで弾いた曲だつたわ。

あの白くて纖細で細い指から奏でられているとは思えない程、情熱的で聞いていた観客さえも魅了した。

優太は、狡い。何でも出来るもの。

私は、いつもステージの片隅から優太の秀でた能力をずっと見ているだけだつたな……。

あの日も家では、優太のコンクール優勝パーティーをやつていたつけ。

そこには、トオルも招かれていた。

ガーディアン、ガーディアンつていつも家族から言われているけど、優太への不満が堪りに堪つて言つてしまつた言葉。

「もう……私、優太のガーディアンなんて、嫌だ！だつてそうでしょ！優太は何でも出来るんだもの。私は、もう比べられたく無いの！だから、別の私立女子校に編入するわ！」

私の言葉に、家族一同水を打つた様にシンと静まり返つてしまつた。そんな中、お母さんが「でも、ガーディアンの宿命は……」そう言いかけた時に、私は思いつきり母を睨んでしまつた。

「優太！これからは自分の身は、自分で護んなさいよ！」

優太

あのこ

はとても傷ついた顔をしていた。

「私は、もうガーディアンは降りるから。髪も元の色に戻すわ。私は自分の人生を楽しみたいの！」

私の言葉に驚いていた優太は、目を丸くさせて私を見ていた。知らず知らずに自分の手に力が入り過ぎたのか、拳を作っていた。そんな私の肩を優しく抱いてくれるのは、モツチーだった。モツチーの優しい藍色の瞳が（それ以上、言うな。百合香）そう言つていたけど、もう私の言葉を止める人（祖母）は、この世には存在しない。我慢に我慢をしていたんだから。

「私は、優太の身代わりじゃないの！」

言つてしまつた後で、優太の俯いた表情を見た時に、哀しくなつた。傷ついていたのは、私だけじゃなかつた。優太もだつたんだつて、今頃になつて気がついた。

百合香が気がつくと其処は、広い草原の世界だつた。だが、その草原は百合香が知つてゐる縁ではなく、辺り一面白銀で覆われた世界だつた。

「ijiは、天国なの？」

そう呟いた百合香は、辺りを見渡すと自分の隣に一角獣のユニコーンが立つていた事に気がついた。

そのユニコーンは、雪の様に白い大地から音もなく出現した。白馬？と思つてしまつて程に白い馬の体には不似合いな角が馬の額から突

き出て居る。其の角は虹を思い起にさせる様な様な淡い七色の角を
している。鬱

たてがみ

は優太を思い出させる様な真つ暗な夜に一際温かく優しく照りすり
百合香を見るとお辞儀をして来た。

(偉大なる戦士ガーディアンよ。そのボックスを開けてみよ)

いきなり上から物を言つて来たユニコーンにむつと来た百合香は、
自分の大きな手を見て驚いた。

少しは膨らんで来ていた胸も、今はまるでまな板のよつてペッタン
コだつた。しかも股の間が何だがモソモソして来る。恐る恐る股間
に触れると百合香は失神寸前になつた。

口をパクパク鯉の様にさせている百合香に、ユニコーンは呆れたよ
うに声をかけて来た。

(あなたが望んだんですよ)

手首に残つた傷も全てある . . . と言つ事は . . 、私の体は
優太の魂が、そして優太の体に私の魂が入つてゐるつて事なの？！
驚きながらも、冷静になれと自分に言い聞かせている私は、呆れ顔
のユニコーンに言われた事を思い出して、手の中にあるボックスを見つめた。

あれ？これつて、間違つていない？

トオルの近くには青いボックスで金の模様が刻んであった。

優太の足下には、銀のボックスで朱と金の模様が刻んであった。

百合香の足下には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであった。

三人が、それぞれのボックスを手にした時に、空から声が振つて
来た。

「ボックス 反応アリ」

あの時の私の手の中には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んでいたものだ。だが、今の私の手の中には、優太が持っていた銀のボックスで朱と金の模様が刻んである。どうやって開けるのだろうか . . . ?

悩んだ挙げ句、箱をじっと見つめた。

百合香の溜息？ボックスなんてクソ食らえ

ボックスを発動させろですって？

ふん。何、上から目線で物を言つてるのよ。この馬！

タダでさえ自分の身体が男になつている事にショックを受けてるんだからね！ 整つた優太の顔で、涙目になつている私つて、他人から見ればどーよ？！

こんなボックスなんて捨ててやる！

手の中にあつたボックスを思いつきり遠くへと投げ捨てた私は、すつきりした。

ボックスは、大きく弧を描く様に、空の様に真っ白な平原の彼方へ消えて行つた。

私は、鼻息も荒く手をパンパンと埃をはたく様に音を立てる、大きく伸びをした。

「大体、人に命令するのが、おかしいってンのよ！」

白い平原に腰を下ろした百合香は、ゴロリと横になるといつの間にかウトウトと眠りに入つて行つた。

トルの葛藤

あの日偶々、あいつらに会つた。何でも、百合香がバス停に群がつてゐる男共を見て足が竦んじまつたとか言つていた。だから、俺と一緒に居れば良いのに . . . 。

何度も、百合香にそう言つたが、百合香は頑に俺の告白を拒否して來た。

「自分は、優太を守らなきゃ行けない立場。ガーディアンとして、自分の幸せを優先する事は出来ない。」

百合香には、まだ誘拐された時に着いたあの心の傷が深く根強くあるのである。俯いていた百合香を俺は抱き締めると、百合香は肩を震わせ声を押し殺して泣いていた。

いつだって、百合香は自分を偽つて生きていた。一番側にいた俺がその事に気がつかない訳がない。俺は、百合香を守りたい。例えアイツが誰であつたとしても、百合香を強く守つてやれる者になりたい。

そう思つようになつた。

空き地で拾つた石こには、俺達の手の上で色鮮やかなボックスとなつた。

トルの近くには青いボックスで金の模様が刻んであつた。

優太の足下には、銀のボックスで朱と金の模様が刻んであつた。

百合香の足下には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであつた。

三人が、それぞれのボックスを手にした時に、空から声が振つて來た。

「ボックス・・反応アリ」

その後、俺達は眩い光の中へと吸い込まれて行つた。
俺が目を覚ますと俺の前には、大きな水晶玉があつた。そこには色々な魔術書が軒を連ねていた。

ゆつたりと泉に使つてゐるととても気持ち良い。

ぱちや・・。ぱちや・・と泉の中で身を任せて泳いでいると、ジョイが物凄い勢いで走つて來た。

優雅に水に使つてゐる俺を見て、指を指して來た。

「おい。ジョイ。指差すのは良く無いぞ。」

それでも指を指してゐるジョイ。

もしかして、差してゐるのは、俺じゃなくて、俺の後なのかな？
ふとそう思つて俺は、自分の後を振り返ると巨大な黒い影が俺の後
に立つてゐた。

これつて、よくファンタジー世界でよくあるヤツ？

巨大なナマズが俺の前で立ち泳ぎしてゐた。

急いで岸まで泳ぎ付こうとするが、慌ててゐる所為もあって上手く
前に進まない。それどころか、巨大ナマズは俺を見てニヤリと笑つ
た。（目が光つてゐたから、笑つたんだ！）

大ナマズは、いきなり大きく口をパカッと開けると俺を吸い込もう
として來た。

「うわー！マズイマズイ！俺魚類ダメなんだつてばー！特に、ナ
マズはヒゲが付いてゐるだけで、嫌なんだよー！誰か助けてー！」

俺の甲高い声が青空に響き渡つた。

その瞬間、大ナマズの額にグサリと刺さつてゐる一本の槍。
後一步の所で俺は、大ナマズに食われそうになつてゐたから、この
隙に急いで泳いで逃げてゐるが、運が悪い事に、俺の足が・・・こ
むら返りを起こしやがつた。

腰も抜けてしまい、俺の体は泉の中へと引きずられる様に沈んで行つた。

泉の水の中から見える太陽は、幻想的だ。

ゆらゆらと揺れる三つの太陽が、薄い緑色に見えて来る。息も苦しく無いから、俺・・・・もう死ぬんだな・・・なんて冷静に考えてしまつた。俺の背中が、泉の深い底の砂地にやんわりと当たると、俺は静かに目を閉じた。

もう疲れた。こんな呪われた血なんて無い方が、この世界の人の為になるよ。きっと。

僕は誰も傷つけたく無いし、僕も傷つきたく無い。誰にも哀しんで欲しく無い。なら、いつそ僕がこのままこの泉の奥底深くで眠つていれば良い・・・・。

薄れる意識の中で、誰かが俺の腕を引っ張つて居る感じがした。泉の中でも、月の様に光り輝く僕の銀髪が、水面に向かつて揺れている。

綺麗・・・・。

唇に当たる柔らかな感触・・・。

何度も何度も息を吹き込んで来る。

ウ・ウゲッ！

喉に詰まっていた水を吐き出した俺は、薄らと瞳を開けた。

俺の目の前には、ジョイではなくて見知らぬ男が俺を解放してくれていた。

ぼんやりとした頭を一気にフル回転で起動させると、僕は自分が何も身に纏つてい無い事を知つた。

僕が、身につけている物は「紅の雲」を首から下げてはいるだけだ。

つまり、素っ裸なのだ。

僕は恥ずかしさのあまり、自分の両手で胸を隠すと、俯いて目を伏せた。

男は、俺に自分のマントを羽織らせると、立ち去りつとしていた。

待つて！と言おうとしたが、砂も水も大量に喉の奥深くか肺にまでも入つていただろう、声が出ない。

咽せる様に、俺は「ホホホ」と咳き込むと男は、慌てて俺の背中を摩つてくれた。

一体、この男は何者なんだろう？

ジョイが遅れて俺の所にやつて來た。

「ホープ！大丈夫かい？」

「ゴホゴホ……」

僕は手で一生懸命に大丈夫だけど、器官に水と一緒に砂が入つてしまつて上手く喋れないと身ぶり手振りでジョイに説明していた。ジョイは、俺の喉に首飾りの紅の糸をチヨンと注すと、ポウツと触れた所から温かく感じて來た。喉と肺に少し入つていた水と砂が、全て取れたようだ。

少し怖々に声を出してみる。

「あああ……。」

良かつた声が出る。

それで、僕は安堵したのがジョイに縋つてポロポロと泣き出してしまつた。

何かこれって、裸で泣いている銀髪の美少女ってヤツ！？
まるで、人魚みたいだな。

目の前の男の人は、俺の瞳を見て驚いた顔をしていた。

そう今の俺の瞳は、銀色に光っていたのだ。それはこの世界の伝説の少女を表す色だった。

「月の光を集めた様な眩い銀髪 月の様に光り輝く銀色の双眸 龍の血を持つ娘 」

その人が口にした単語を俺は耳にした時に、「 . . . ジョイ ! ふ、 . 服を！早く！」そう言うと、その場から立ち去ろうと勢い良く立ち上ると、僕はフラリと倒れてしまった。

ジョイは、僕の体力が消耗してしまった事と、僕の目の前に居る男の事でその場に立ち尽くしていただけだった。

薄れ行く俺の意識の中で「姫 やっと見つけました

・ふいへ 」そう聞こえて来た。

僕の意識は、そこで切れてしまった。

目が覚めると僕は天井が高くフワフワの広いベッドの上に寝かされていた。ゆっくり辺りを見渡すと、ベッドに天蓋が付いている。それに僕が居るこの一見お姫様と言わんばかりの部屋は、40畳あるかと思う程広い。

僕は、白い絹のドレスを着せられている。自分で着替えた記憶はない。なら一体誰に ?

疑問だけが残っている。

あの俺を巨大ナマズから助け出してくれたのは、一体誰なんだ？キングサイズのベッドの上で考え事をしていた僕は、自分の側にジョイが居ない事に気がついた。

ジョイは、僕を守っていると言っていたのに 。ベッドから起き上がりふらふらと窓辺に立つと外は、もう薄暗くなっていた。

部屋に備え付けてある魔法石の一つである火の石に寄つて光が作られている。

「ふうん。電気じゃないんだ。」

その光の反射で、ホープが窓の外を見ようとした時に、自分の顔が窓ガラスに反射して見えた。

「ひ、瞳が……銀色に戻っている。」

確かにジョイから、自分の力を使うと魔法に寄つて変えてもらつた僕の瞳が、元の銀色に戻ると言っていたのは覚えている。と言う事は、俺を助けたあの男にも、この瞳を見られたのだな。自分の瞳の色を他の人に見られてしまったと狼狽えていたホープは、自分の頭の中に血を抜き取られてしまう事しか、浮かばなかつた。ほぼパニック状態に陥つたホープは、この部屋から抜け出す事しか考えていない。

部屋の窓からは、朝日が差し込んで来ている。
恨めしい程の太陽の光。

それも三つもある太陽。元の世界の太陽みたく一つで十分なのにさ。そんな事を言つているホープは、漸く気がついた。
今、この場所が何処にあるのかを。
自分の目の前を巨大なマズが優々と泳いで行つた。
それを見たホープは、全身鳥肌物で、窓から離れると急いでドアの方へと向つ。

「ブエブエブギヤア！」

日本語にもならない叫びをあげてしまった俺。

俺つてば、魚が大の苦手。その中でも特にナマズつて言つのが一番

の苦手なのである。

あのヒゲが、まるで意志でも表しているのかと思ひ程、独りでに動いているのが、嫌なのだ。

広い部屋を駆け回り、俺はやつとの思いでドアの取っ手に手を付けた。

その時に、ギイ～ツと言ひ音と共に誰かがこの部屋に入つて來た。俺は、数歩後へと下がると銀色の双眸を大きく見開いたまま、今まさに誰かが入つて來るのかと見ていた。

もし、ナマズだったら、俺は泡を吹いて倒れてしまつだらうとそんな弱気な事を考えていた。

しかし、俺の考えとは裏腹に、ドアを開けたのは人間の手だつた。流れる清流を表すような色、ターコイズブルーの髪を持つ人間。筋肉の付き方で、男なのだろう。そこまで筋肉ムキムキとは言わないが、無駄の無い体つきをしている。

身長は俺の倍近く・・・。デカイ。僕が160くらいの身長・・・。と言つても、春から高校生の僕は、成長期なのだから、これからまだまだ伸びるのさ。死んだ婆さんも、爺さんも背がデカかつたしな。両親達も、2人とも170を優に超えてる。

でも、ふと思つたんだが、今の僕は百合香の体になつてたんだ・・・。

あいつも成長期と言う事は、ないだらうな・・・きっと。

身長と成長期の事を考えていた僕は、改めてこの部屋のドアを見つめていた。

「すつげー観音開きのフレンチドアかよ・・・。まるで一ド＝オブ＝ザ＝リン だな。」と一人で納得する様に呟いていた。

この部屋の扉の高さが3メーター位あるから、何だか僕が小人みたいに感じるんだが・・・。全ては目の前にいるこの馬鹿でかいコイ

ツの身長に合わせて作られているんだと納得した。

中に入つて来たデカイ男は、固まつてゐる僕を見るなり、僕の目の前に跪いた。

「龍の血を持つ娘……伝説の通り、輝く月の光を身に纏うよう
なその銀の髪に、月を光を宿したその瞳……」

「おい、こいつってば僕を落とそうとしているのか？」

俺はまるで羞恥プレイでもされているような気分だった。僕だって
そんな歯の浮くような台詞は言わない。と言つて言える訳無いだろ
！ 本当に聞いているこつちが恥ずかしくなつてしまつ。

相手は、僕がそんな事を思つているとは知らないのだろう
僕の手を取ると口付けをして来た。

そんな田の前の男の紳士的な態度に、僕は驚いて後ずさりをして
いる。

「ジョイ……ジョイは？ オ……僕の護り手のジョイ……
・ジョイは何処なのぞ。」

僕のがジョイを探している事を知つた男は、パチンと指を鳴らすと、
今閉めた箸のフレンチドアが開き衛兵に伴われたジョイが連れて來
られた。

「ジョイ……！」

オレは、ジョイに会えた嬉しさにジョイに抱きついた。心細さと苦
手な大ナマズが窓の外から、オレを見ていると言う事で涙がポロポ
ロと出て来る。そんなオレをジョイは優しく抱き締めてくれた。
膝を折り、俺の目線まで下りてくれるジョイは、何処となくいつも
よりも優しい。いつもなら、オレにお調子者のダメホープと言つて

いるのだが、今日は違う。一体どうしたんだ？
僕は首を傾げている。

「ジョイ。此処はどこだ？」

「ホープ……あなたは今、女性なのですから、もう少し言葉使いに気をつけてください。よしやくご自分の事を俺から僕に直せたのですから、次のステップに行きましょうか。今度から私と下さいね。」

僕……じゃなくって、私はため息をつきながらジョイに向き直った。

銀色の双眸を光らせると、俺の……じゃない私の前に跪いている男を指差した。

「ジョイ。此処は、何処なの？！ そして、私の手をさつきから食べ物の様に唇をつけて来る、このスケコマシは一体誰？！」
「す、スケコマシ……。」突然ホープにそう言われた男は、面食らつた様に咳くと、次に豪快に笑い始めた。
「こいつは面白い。俺の事をスケコマシと言つて来る女が伝説の姫君だとは思いもしなかったぜ！」

男は、面白そうにオレ……じゃなかつた私の長い銀髪を一房掴むと、私の髪に口付けをした。

別に髪の毛一本一本に神経が生えている訳じゃないが、な……。
何だよこの羞恥プレイは……？

ホープは、自分の顔が完熟トマトの様に真つ赤に一気に染まっているのが、自分でも分かつた。

そんな初心なホープの反応を見て、面白そうに男はホープの細く白い手首を掴むと素直に自分の思った事を言つて来た。

「折れそうな細い手首だな。」

それを聞いただけで、ホープは真っ赤になる。今、まさに自分は男の腕の中に居る。自分の華奢な腰を男の逞しい腕で抱き締められているから、動こうにも動けない。ただ身動きが取れないから、男の腕の中でジタバタしているだけなのだ。

「お・・・お戯れは、お止め下さい・・・。それよりも、此処は何処なんです。」

必死になつてホープは、見知らぬ男の腕の中からびりびりと逃げようかと考えていた。

「アクアトピアだ。」

「アクアトピア? そんな国の名は聞いた事がありません。早く私を下ろして。」

ホープの頭の中にはこの世界の地図が瞬時に浮かび上がつたが、幾ら探してもアクアトピアなどと書つた国は見つからないのである。男は、ホープを抱き締めたままベッドまで運ぶと、そつとホープをベッドの上に寝かせた。

身の危険を感じたホープは、何とかこの男の魔の手から逃げようと上体を起こして、少しづつ後ずさりをしていた。

もう少しで、この広い大きなベッドから下りられるーと思つた瞬間、巨大な大ナマズが急接近して来た。嫌な気配を感じたホープは、ふと恐いもの見たさで窓の方を振り返ると、其処には窓一面に映る巨大な大ナマズの顔があつた。

ジョイの方へ逃げようと必死になつて誰かにしがみついた。

「ほう。伝説の姫君は我が家の番犬が苦手と見たな。姫、アレはボチです。」

「ボチ？ 番犬？ アレはどう見たつて、魚だ。しかもナマズ！ それがどうやつて番犬になるんだ？！」

思わず突つ込みそうになつたホープは、ふと気がついた。窓の外から見える風景は、地上の物ではない . . . 。

「水の中の都市？ そんなの神様だつて教えてくれなかつた . . . 。

「ホープの言葉に、男は腕を組むと低いテノール音で心地よく私に言つて來た。

「それは、地上の話だからだ。アクアトピアは、2000年前に滅んでいた。最後の予言者、ダスコ＝ガマダの言葉では、地上の人間達が精靈界まで支配しようとしていると。この精靈界の高い文化を薄汚い人間達は、真綿で我らの首を絞める如く少しづつ奪つて行つたのさ。その後、此処は不毛の地－即ち死の谷と呼ばれる様になつた。」

「ホープの腕を掴んでいた男は自分の胸にホープの手を乗せるとこの国アクアトピアの悲惨な歴史の事を話してくれた。

「水の中でしか生きられなかつた弱い力を持つ物達は、泉の水が無くなると直ぐに力つきてしまつた。

何とか生き延びた俺達は、自分達に魔法をかけ水の無い陸の上でも生きられる様に、術を施した。いつか俺達の国、アクアトピアを蘇らせてくれる伝説の姫君に会える事を夢見て。」

「 . . . 言う事は、オレが . . . ジヤなかつた私が、精靈達を召

還して作らせた、この泉と言うか、湖がアクアトピアと言う事なんか . . . 。

じゃあ、この死の谷で盗賊と恐れられている人達は、元々はこのアクアトピアの住人で人間を憎んでいたと。だから、ここ死の谷に入つて来る人間を次々に襲つたと言つ訳なのか . . . 。

考え事を頭の中で巡らせていたホープの顎を引き上げた男は、そつと顔を近づけると、掠めるように唇を合わせた。

「お お . . . 落ち込む 私のファーストキスが男に寄つて奪われるなんて . . . 」

落ち込んでいたホープに追い打ちをかけるように、ジェイが私にトドメを差して來た。

「いえ、ファーストキスではありませんよ。だつて、この方、先ほどあなたを助ける為に人工呼吸を何度もやつていたもの。」

「じ、人工呼吸 . . . つてマウス＝ツウ＝マウス？」

ホープのガラスの心は、ピキッと音を立てて崩れ始めた。
銀の双眸を潤ませて、ホープは男の横つ面を思いつきり平手打ちした。

心地良いパンと音が寝室内に響いた。

「名を名乗れ！」

ホープは、今にも精霊達を呼び出さんとしている。
そんなホープの反応を見て男は両肩を竦めた。

「水の中で溺れた姫を助けてやつたのに、その恩人に対してこの態度とは、伝説の姫もただの小娘だつたって訳か。俺の名を知りたかつたら、俺の寝室へくればいい。だが、無事には返さないけどな。

此処から出たければ、出るのは構わないが、外には、ポチが待っているからな。地上に出たければ、オレの名を知る事だな。そうすれば、出してやる。」

「…………なんて事だ。オレは…………いや、私は囚われの姫となつてしまつたのか…………。

頃垂れるホープの肩をジョイは、優しく抱き締めてくれていた。

「ジョイ…………。何故、教えてくれなかつたんだ。このアクアトピアの事を……。」

「それは、あなたが見境なく”新幹線”なる物と同じ様に猛スピードで、この谷を飛び越えようとなさつたからです。それをしなければ、良かつたのに…………。あなたは自分の為ではなく、ここにいえ…………他の人間がもし迷つた時の事を考えて、巨大な湖を作つてしまつたのですよ。初めは泉だったのですが、周りの森林が水を呼び、あなたが一晩眠つている間に、泉が湖へと変化して行つたのです。こんな風に。」

ジョイは、神様から貰つた地図を広げるとこの世界で一番面積が大きい死の谷を赤く丸で囲んだ。

どうやつて、あの男の名を知れば良いんだ……。

ホープは真剣に悩んでいるとジョイが手をポンと叩き、オレ…………。じやなかつた私の顔を見た。

何だか、嫌な予感がするのは、気のせいでしょうか…………。

ホープに近づいたジョイは、グワシッと私の手を掴み風呂場へ連れて行つた。

あー何だかドンドン嫌な予感がしてくる。

これつて、まな板の上の鯉ならず、土鍋で調理されるヒヨコつて感じだ . . . 。

「ホープ。聞こえますよ。それを言つなら、五右衛門でしよう。釜茹での刑にされたんだから。馬鹿な事を言つてないで、さつさと入つて下さい。湯浴みしますからね。しつかりとピカピカに洗うんですから！」

あ・あ・あの・・・そんなに目を光らせないで下さい。

はつきり言つて怖いです。教われるんじやなくて、生け贋にされそうで . . 。

生け贋？！

俺の心の声を聞いたジョイは、天使の笑顔で俺の髪を丁寧に洗つている。

「ホープ。オレではなく私と言いなさいと何度も教えたでしょう！」

顔中泡だらけになりながらも、フルブルと震えるお・・・じゃない、私の黄金の右手 . . 。

わつき、一瞬物凄い殺氣を感じたが、深くは考えない様にしよう . . 。

ジョイに一皮も二皮も剥かれるかと思つ程、石鹼で擦られ、髪の毛は念入りに洗われるわで、お・・・じやなかつた、私は心身共にクタクタになつていた。

ぐつたりしている私を抱き抱え、器用にも夜会用のドレスに着替えさせると私の背中を叩いて起こして來た。

「何すんじゃいー」「うあー」

そう言ひそうになつた。

だが、ジェイの後の窓ガラスから、光る一つの田・・・・・。い、嫌だ・・・・・み、見るな・・・・・。田を離そつにも、恐いもの見たさなのか、ホープは凝視してしまつてゐる。

うねる様に動く一本の長いヒゲを見た途端、一気に田眩を起したホープは、その場で失神した。

「う・・・うん・・・」

ゆつくり目を開けると、此処つて初めに連れて来られた部屋とは違う所みたいだ・・・・。

何だか妙に、妙に、そして最大級に嫌な予感がするんだけど・・・。つて、オレつてば何処で寝てんの！？

此処つて、どう見ても神殿難だけど・・・・。

やっぱ、オレつてば生け贋なんだ・・・・・・の際もう田を瞑つたまま寝た振りで決めとくか。

幸い、暗い神殿には誰も居ないし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7245u/>

three 龍の血を持つ娘

2011年12月1日23時27分発行